ISSN 1349-5127

保育子育て研究所年報

2005年度

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所

－第3号－

目　次

Ⅰ 子育て交流会実践の展開

「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」をモットーに…
— 子育て交流会の3年目の取り組み —【清　葉子　　宍戸洋子】・・・・・・・ 2

Ⅱ 保育実践報告

ピカピカどろだんごの魅力 — 静かに広がるブーム —【田中義和】・・・・・・・ 18

たかが泥だんご　されど泥だんご
— ただの泥だんごが、磨き方次第で光だす！—【山本春美】・・・・・・・・・・・・・ 21

Ⅲ 保育研究報告

保育所における「家庭的な保育」について考える：0歳児保育の実践から
【松本博雄】・・・・・・ 30

Ⅳ 海外保育子育て支援の動向

カナダから学ぶ子育て支援プログラム【小嶋玲子】・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

資料

2005年度保育子育て研究所事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

2005年度保育子育て研究所会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

I 子育て交流会実践の展開

「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」をモットーに…
― 子育て交流会の3年目の取り組み ―

清　葉子　　宍戸洋子

3年目の子育て交流会

子育て交流会も3年目を迎えました。昨年度より、開催時間を延長し開催回数を増やしたことが好評を得て、より多くの方が参加できるようになりました。年々、こうした交流会が入園前の親子の高いニーズとして求められていることを強く感じます。

今年度も「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」をモットーに、これまでのアットホームな雰囲気を大切にしながらいくつかの改善点を織り込みスタートさせました。

9月より月4回（基本的に第1・3火曜日、第2・4水曜日）午前9時30分より11時ごろまで実施することにしました。内容としては、前年度までのスタイルと同様、はじめの1時間は子どもを自由に遊ばせながら母親同士の交友を深めるなどの時間とし、10時30分ごろから11時頃までを親子でその日の「お楽しみの活動」を楽しむ時間としました。「お楽しみの活動」は、昨年度までの企画・運営をもとに、一年間を通して親子でいろいろな経験を楽しめる内容を企画しました。

子育て交流会の終了のあとは、11時30分頃まで部屋を開放し、親子で自由に遊んでいく時間をもてるようにしました。また、専攻科の学生や保育学部3年のゼミに参加者を募り、学生の参加も呼びかけました。（資料2　子育て交流会の経過・参加人数・内容参照）

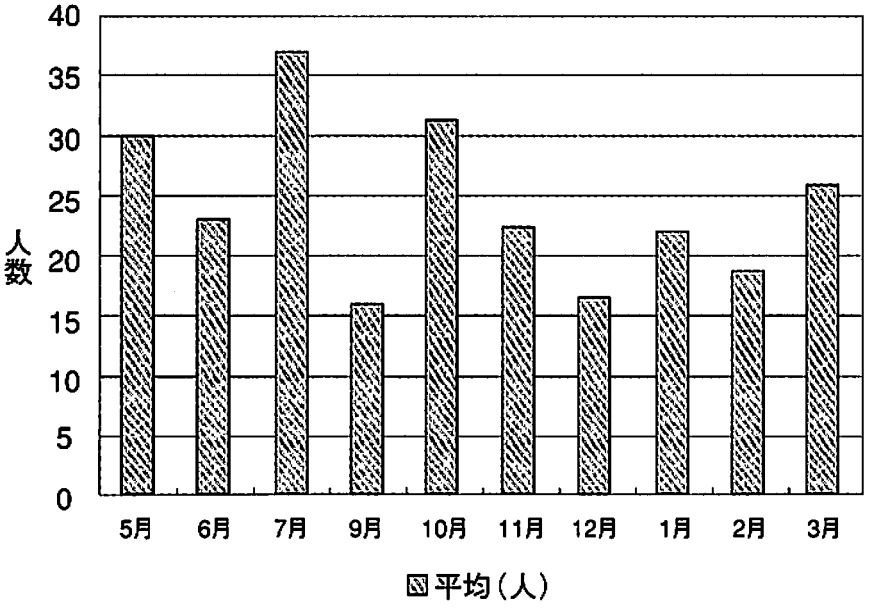
今年度、新しい試みとして、保育子育て研究所と付属幼稚園との話し合いのもと、同じキャンパス内にある付属幼稚園のホールを借り、広いスペースでの子育て交流会も月1回程度実施しました。このように、保育者養成大学の子育て支援というメリットを充分生かせるよう、保育子育て研究所の会議で相談し、検討を加え3年目をスタートさせました。

お母さんといっしょに絵本を見たよ

参加状況について

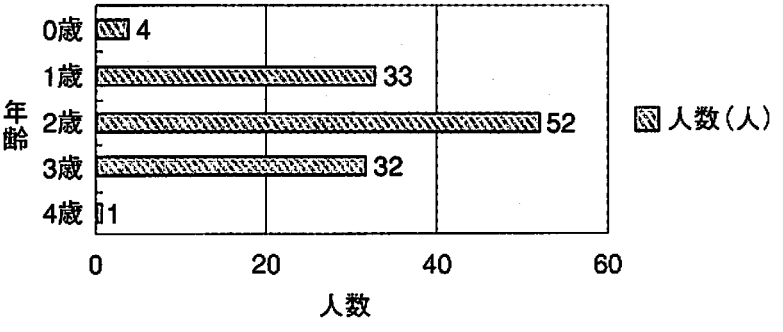
今年度は、年間23回の子育て交流会を実施しました。その間、120組の親子の参加があり、延べ527組の親子が子育て交流会に参加しました。親子合わせると延べ1,000名を超える参加があったことになります。月別の平均参加者数は、年間を通して1回あたり平均24組でした。5月から7月までは清の第二子出産で、交流会の回数を減らし月1回宍戸が担当、9月からは清の産休があけ、新たに3名のスッタフも加わり毎週交流会が実施されるようになり、参加者が集中することなく適度に分散されました。しかし、気候のよい10月は、毎週参加する親子の姿が多くみられ、その後も、毎回、多数の参加者がありました。(図1参照)

図1　月別平均参加者数



また、子育て交流会には、生後1か月の赤ちゃんから入園前までの子どもの参加がありますが、歩きまわるようになる1歳児から友だちを求めるようになる3歳児までの参加が多く、特に、自我意識が芽生え、動き回り、いたずらが盛んになり、母親の手にあまる2歳児の参加が多数ありました。(図2参照)

図2　参加者年齢構成



子育て交流会の開催のお知らせは、4月に付属幼稚園の保護者向けに配布すると同時に、2か月に1回参加者の方へ開催日時を知らせました。(資料1　子育て交流会案内)また、大学のHPや、みどり子育て応援団発行の「みどり子育て情報」(2003年より隔月1500部発行、B5版4P名古屋市緑区内50箇所で無料配布)にも開催日時を載せてもらいました。付属幼稚園だけではなく、地域の多くの方々に知らせ、限られた人だけではなくこのような機会を必要としている多くの方々にきて頂けるようにしました。

子育て交流会へ参加するきっかけは、どこかで情報を得た方が、友だちを誘って参加されるというケースが一番多くみられました。(図3参照)

図3　交流会への参加のきっかけ

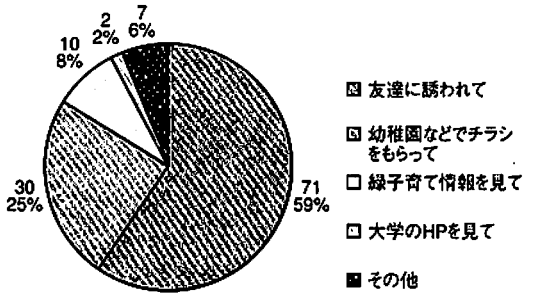
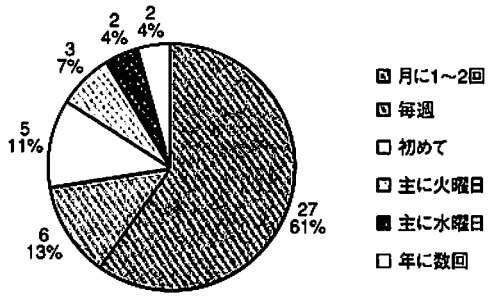


図4　参加頻度



子育て交流会への参加頻度は、月に1～2回の参加者が61％と多く、毎週参加される方も13％ある一方、毎回、はじめての参加者も数名あり、子育て交流会の参加者の枠を広げていきました。(図4　参照)

参加者の交流会への参加の目的は、同年代の子どもと遊ばせたいと思っている親が57％と多く、次にいろいろな経験をさせたいと回答した方が23％ありました。地域から子どもの姿が消え、子どもどうしの触れ合いの場がなくなり、こうした交流する場が求められていることがわかります。また、幼稚園・保育園入園前の集団生活の機会の場として考えている方も18％あり、幼稚園・保育園入園前の子育て支援の場としてどのような活動を企画していくのか、今後検討を加えていきたいと思います。(図5参照)

図5　交流会の参加目的(複数回答)

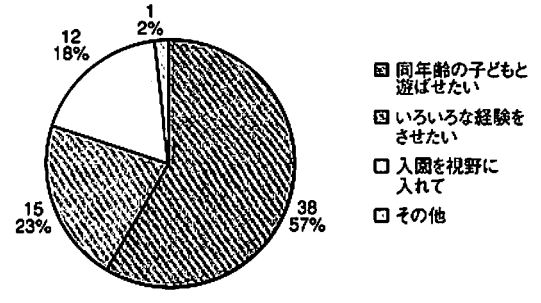
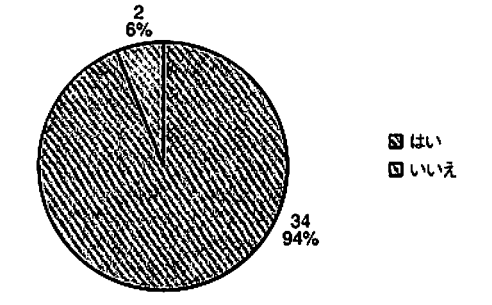
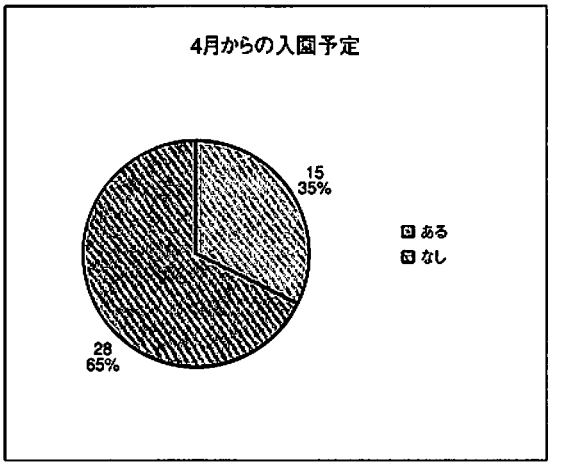


図6　交流会の参加目的の達成



参加者の94％の方が、交流会参加の目的を達成されているようですが、6％の方の気持ちも大切にくみとっていくことが今後の課題です。(図6参照)

また、4月から幼稚園・保育園へ入園する予定がある方は35％で、子育て交流会は入園前の子ども同士の好い触れ合いの場になっています。入園予定のない65％は1歳、2歳児で、赤ちゃんを含め、たくさんの低年齢児をもつ母親たちの参加は、こうした場を子どもと同時に、大人も必要としているあらわれと思われます。(図7参照)



付属幼稚園のホールでの活動

これまでの子育て交流会の中で、子育て交流会室は時に狭く感じられる場面がありました。参加者からも、時には広い場で身体を使った遊びもしてみたいという意見も聞かれました。そこで今年度より、月1回程度付属幼稚園のホールに場所を移して、子育て交流会を開催することにしました。

玉入れなどの運動会ごっこやリズム表現、運動遊び、体操などを企画し、主に親子で身体を動かして遊ぶ活動をメインとしました。ピアノに合わせて、うさぎやカエルに変身して遊んだり、「サンサンたいそう」や「ぐるぐるどっかーん！」など子どもたちに人気のある体操を親子で楽しみました。また、交流会の後は、親子でしばらく園庭で遊んでいく機会ももつことができました。

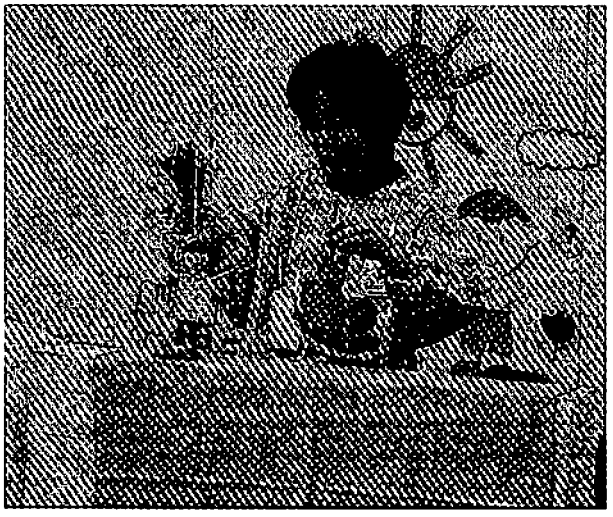
これらの活動は、「広いホールで遊ぶことができるので気分も変わり良いと思う。」「園庭も開放されるので子供は大喜び。」「いつもとは違った遊びができて良かった。」など参加者からも好評を得ることができました。今後も、付属幼稚園と連携をとって開催回数や活動内容を検討してきたいと思います。

親子でふれあい遊び

スタッフの増員とお母さんボランティア

今年度より、清、宍戸に加え、3人のスタッフが加わりました。事務担当スタッフとして難波、親子でのおもちゃなどの制作活動を担当する水谷、触れ合い遊びやわらべうたなどを紹介する上村です。いろいろなスタッフによる、それぞれ特色のある活動が展開されるようになりました。

また、昨年度から引き続き、ボランティアのお母さんも常時2～4名ほど参加してくれました。今年度の参加者は、子どもを2人連れて来られる方も多く、0歳の赤ちゃんをボランティアのお母さんに頼み、親は、安心して上の子どもと一緒に活動に参加するといった場面もよくありました。お母さんボランティアの存在は、育児の先輩として、はじめて参加される方やお母さん同士のパイプ役になり、時には子ども同士のトラブルにも上手く対処してくれるよい役割をはたしてくれました。



人形劇

学生によるペープサート「おおきなかぶ」

学生の参加

今年度も専攻科の学生が交流会室の壁面制作をしたり、手作りの教材をもって参加しました。また、保育学部3年生がゼミの時間を利用して参加し、延べ100名程の学生が参加できました。普段は、なかなか未就園の小さな子どもたちに接する機会が少なく、はじめはどのように接したらいいのか戸惑う様子も見られましたが、次第にお母さんとも会話を交わすようになり、笑顔で小さな子どもたちに寄り添っていっしょに遊ぶ姿が見られるようになりました。学生たちは、親子のふれあいを身近に感じることができたようです。

また、ゼミの時間に企画を考え、「おおきなかぶ」を題材にしたペープサートを演じたり、ボーリングやコマなどのおもちゃを親子で一緒に作るゼミもありました。将来の保育者として、年齢に即した教材づくりを考えるきっかけとなったり、実際に子どもたちの前でやることによって新たな改善点などを学びとっていきました。（資料3　子育て交流会参加学生の感想参照）

自主交流会

昨年の子育て交流会の参加者から、交流会の開催されない日に、親子の交流をしたいので、部屋を貸してほしいという申し出がありました。保育子育て研究所の会議で協議し、開かれた大学として地域の方々に場の提供をし、母親たちの自主的な子育て活動を支援していこうということになりました。

今年度の自主交流会は、9回実施され、子ども延べ54名、大人延べ57名の参加がありました。自主交流会には子どもを遊ばせながら、育児について気楽におしゃべりをしようと気の合う母親たちが集まりました。子どもを幼稚園に送りその足で母親だけで参加する方も加え、兄弟けんかの対応やその接し方について、泣く子の対応、衣服の着脱や排泄、食事など基本的生活習慣の自立について、子どものしかり方、ほめ方など、日ごろ育児で困っていることや悩みを出しあったり、体験を語りあうなかで、「自分だけでなかった」「子どもはみんな同じなんだ」「もっと、育児を楽しまなくては」と、気持ちが楽になっていったようです。時には絵本の読み聞かせをしたり、手遊びをしながら、回を重ねるごとに、親子の交流が深まっていきました。

こうした母親たちによる自主的な交流会の輪が広がり、子育ての楽しさを見出し、やがて、地域の子育て支援の協力スタッフが育っていくことを願っています。

まとめと今後の課題

乳幼児の虐待、子どもの命を奪う事件があとをたちません。子どもが安心して遊べる広場がうばわれ、密室の中で24時間母と子が向かい合っています。これでは、子どもも親も息苦しくなります。「友だちとあそばせたい」「いろいろな経験をさせたい」という親の切実な願いで、今年度もたくさんの親子が、遊び仲間、遊び場を求めてこの子育て交流会室にやってきました。

この名古屋キャンパスは、緑が豊かで季節の花が咲き、幼稚園の子どもの姿と声が聞こえ、親子の心を開放させてくれます。母親に手をひかれたり、抱かれている幼児やベビーカーの乳児の姿に触れることは、将来、保育者や母親になる学生にもいい刺激をあたえてくれています。

当初、ピアノ練習室だった場所を改装したこの交流会室は、部屋の面積から10組程の親子がゆったりくつろいで遊べるようにと計画し、スタートしました。1年目は、月1回のペースで、毎回、年間平均10組の親子の参加でした。2年目は、参加者の希望で、月4回実施するようになり、参加者も増えていきました。開設して3年目の今年度は、この活動が地域に根ざしてきたようで、多数の参加者があり毎回平均24組の親子の参加がありました。正直なところ、部屋の広さに比べ参加者が多く、うれしい悲鳴をあげています。そこで、散歩や、戸外での活動を取り入れましたが、雨の日、風の日、寒い日、暑い日もあり、幼い子どもには，やはり、ゆったり遊べる場が必要です。また、年齢的にトイレトレーニングの時期でもあり、交流会室に隣接したトイレを設置することは、早急に解決したい問題です。今年度から、付属幼稚園の遊戯室が月1回程度借りられるようになったことは大きな前進です。今後、この回数が増えていくことを願っています。

名古屋キャンパス内に、7号館の建設の声が上がっていますが、保育者養成大学として、地域の乳幼児をもつ親子、学生、研究者がいつでも自由に参加できる子育て支援室の設置を切望しています。また、3年目を迎えた子育て交流会は、スタッフが増えましたが、全員、保育子育て研究所の専任ではありません。保育者を養成する保育科、保育学部のある大学として、子育て支援のモデルになり、地域の子育て支援センターの役割を担うことが今、求められています。保育子育て研究所の充実のため専任の職員の配置が強く望まれます。

資料1　子育て交流会案内

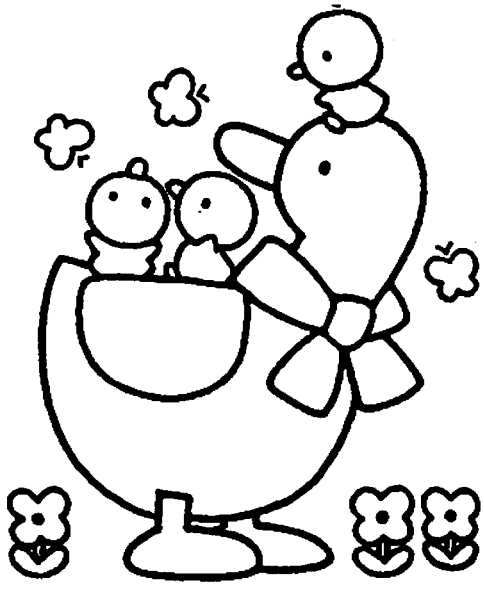
子育て交流会　1・2・3がつの予定

1月

★1月 11日　水曜日

★1月 17日　火曜日

★1月 25日　水曜日　付属幼稚園



2月

★2月 7日　火曜日

★2月15日　水曜日

★2月21日　火曜日　付属幼稚園

3月

★3月 7日　火曜日　大きくなったね会　今年度最後の子育て交流会です

お知らせ

付属幼稚園での開催日は、幼稚園を入って右手のホールへお集まりください。
10時頃までは、幼稚園バスが出入りするためお子さんから目を離さないように
ご注意ください。幼稚園の門は、必ず保護者の方が開閉し、施錠してください。

9時30分から11時頃までやっています。好きな時間にお越しください。
自由に遊んでいただき、10時30分頃からお楽しみがあります。
電話 0562－97－1306（内線330）子育て交流室

資料2　子育て交流会の経過・参加人数・内容

※　5月17日（火）　第1回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　３０名　　大人　３３名　　学生　１０名
読み聞かせ　手遊び、学生によるペープサート

5月18日（水）　自主交流会　天気：くもり
子ども　9名　　大人　9名
自由遊び、読み聞かせ（2冊）、手遊び

※　6月　7日（火）　第2回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　２３名　　大人　２６名　　学生　１１名
手遊び「目の窓開けろ」、歯磨き人形
学生によるペープサート「こぶたぬきつねこ」「ぞうさん」「アンパンマン」

6月14日（火）　自主交流会　　天気：晴れ
子ども　4名　　大人　6名
自由遊び、学生によるペープサート「かたつむり」「ぞうさんとにらめっこ」「どれみのうた」「アンパンマン」

6月21日（火）　自主交流会　　天気：晴れ
子ども　2名　　大人　4名　　学生　9名
自由遊び

6月28日（火）　自主交流会　　天気：くもり
子ども　4名　　大人　6名　　学生　8名
自由遊び、学生による「一ぴきの野ねずみ」「おひるねしてるのだあれ？」

※　7月　5日（火）　第3回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　３７名　　大人　４０名　　学生　9名
手遊び「目の窓開けろ」、「アンパンマン」
折り紙「サルの山登り」
学生によるペープサート「ぶたのこえ」「キャベツの中からあおむし出たよ」

※　9月　6日（火）　第4回　子育て交流会　　天気：晴れ時々曇り
子ども　１５名　　大人　１４名　　学生　9名
手遊び「目の窓開けろ」

学生による手遊び「魚が跳ねた！」「小鳥のピッピとチッチ」

※　9月14日（水）　第5回　子育て交流会　天気：曇り時々晴れ
子ども　１１名　　大人　４名
手遊び「パンダうさぎコアラ」、製作「うさぎのダンス」
うた「でたでた月が～」

※　9月20日（火）　第6回　子育て交流会（幼稚園ホール）　天気：曇り時々晴れ
子ども　２４名　　大人　１８名
絵本『はねはねはねちゃん』、手遊び、表現遊び
紙芝居「あんぱんまんとかびるんるん」

9月21日（水）　自主交流会　　天気：晴れ
子ども　６名　　大人　７名
自由遊び、読み聞かせ

※　9月28日（水）　第7回　子育て交流会　　天気：雨
子ども　１４名　　大人　１２名
「せんたくものをほそう」（のりを使って）、読み聞かせ「だれかな？」
うた「ありさんがごっつんこ」

※　10月　4日（火）　第8回　子育て交流会　　天気：曇り
子ども　２２名　　大人　１７名　　学生　（専攻科９名　北島ゼミ７名）
「目の窓開けろ」
学生による「なすおくんとエリザベス」「ウサギのロケット」

10月　5日（水）　自主交流会　　天気：雨
子ども　５名　　大人　６名
自由遊び

10月11日（火）　自主交流会　天気：曇り
子ども　１１名　　大人　６名
自由遊び（幼稚園振り替え休日）

※　10月12日（水）　第9回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　３８名　　大人　３３名　　学生　２名（浅野ゼミ）
読み聞かせ「どんぐり　どんぐり」の後、どんぐり拾い

※　10月18日（火）　第１０回　子育て交流会（幼稚園ホール）　　天気：雨
子ども　３６名　　大人　３２名　　学生　９名（藤田ゼミ）コマづくり
自由遊び、歌、体操「ぐるぐるどっかーん！」

※　10月26日（水）　第１１回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　２９名　　大人　２７名
手遊び、布を使っての遊び、おさるさん、赤ちゃんの遊び

※　11月　1日（火）　第１２回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　２２名　　大人　２１名　　学生　９名（専攻科）
ペープサート（学生）　手遊び、にわとり

※　11月　9日（水）　第１３回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　１９名　　大人　１７名
ストローの竹とんぼ

※　１１月15日（火）　第１４回　子育て交流会（幼稚園ホール）　　天気：晴れ
子ども　２６名　　大人　２４名　　学生　８名（田中ゼミ）
楽器を使ってリズムあそび

※　12月　6日（火）　第１５回　子育て交流会（幼稚園ホール）　　天気：晴れ
子ども　３０名　　大人　２７名　　学生　７名
自由遊び、体操「ぐるぐるどっかーん！」

※　12月14日（水）　第１６回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　３４名　　大人　３０名
絵本「だれのあしあと」、クリスマスリースをつくろう

12月20日（火）　自主交流会（前日の大雪のため交流会は中止）　　天気：晴れ
子ども　７名　　大人　６名
自由遊び、折り紙でサンタさんづくり

※　1月11日（水）　第１７回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　２０名　　大人　１７名
学生による手遊び、ボーリング

※　1月17日（火）　第１８回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　１７名　　大人　１５名
「アンパンマン手遊び」「大きなかぶ」（左口ゼミ学生）
「あやつり人形」「大きくなーれ」

１月１８日（水）　自主交流会　　天気：晴れ
子ども　６名　　大人　７名
自由遊び、手遊び、読み聞かせ

※　１月２５日（水）　第１９回　子育て交流会（幼稚園ホール）　　天気：晴れ
子ども　２９名　　大人２６名
自由遊び、折り紙と広告の紙を使ってミニ凧づくり

※　２月　７日（火）　第２０回　子育て交流会　　天気：雨
子ども　１４名　　大人　１４名
みたてあそび、カードでことばあそび
「目の窓開けろ」「カレーライス」

※　２月１５日（水）　第２１回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　２５名　　大人　２３名
厚紙を使ってパタパタ（表と裏がくるっとひっくり返る）

※　２月２１日（火）　第２２回　子育て交流会（幼稚園ホール）　　天気：曇り
子ども　１７名　　大人　１７名
自由遊び、「ひなまつり」「むすんでひらいて」
リズム表現体操「サンサンたいそう」、「ぐるぐるどっかーん！」

※　３月　７日（火）　第２３回　子育て交流会　　天気：晴れ
子ども　２６名　　大人　２３名
「目の窓開けろ」「グリとグラの手話の歌」
「アンパンマンのうた」、アンパンのメダルづくり

2005年度　子育て交流会

・交　流　会　23回	・子ども　558名	・大人　510名	
	・学生　90名		
・自主交流会　9回	・子ども　54名	・大人　57名	
	・学生　17名		

資料3　子育て交流会参加学生の感想

- あまりの参加親子の数の多さに驚いた。
- 自由に動き回れる子どもや、お母さんに常に抱っこしてもらっている子どもがいて、年齢ごとに様々な関わりが必要だと思った。
- 作ったニワトリで楽しそうに遊んでくれたので、うれしかった。
- すごく緊張したが、暖かい雰囲気で、最後には嬉しいような楽しいような気持ちになった。
- 子どもを前にすると一緒に遊びたくなってしまうので、関わる時間も欲しいと思ってしまう。
- 年齢も考えて、もっと子どもの目をひくものを、またやってみたい。
- このような親子の交流会が、本当に必要とされているということを、改めて実感した。
- みなさんの前でパネルシアターをさせていただいた。すごく緊張したが、親子の前で演じるということは初めてだったので、とても勉強になったように思う。
- 教材発表だったが、あまりの人と子どもの数で頭が真っ白になった。この交流会に関わっていく間に、自分のあがり症を克服していきたい。
- 子どもたちが騒ぐ中、どうやって子どもを自分にひきつけるか、この授業で学んでいきたいと思う。
- 子育て支援室には今まで3～4回入ったことがあるが、果物（廊下の）をめくると動物がいるなんて、今日初めて知った。（子どもがめくるのを見て）子どもはステキだと思った。
- 子どもに笑いかけると、笑い返してもらえて、とってもかわいかった。
- 前回よりも年齢が高い子が多いように思った。そのためなのか、ウレタンのブロックで遊んだり少し走ったり、転がったり、活発に動く子がよく目に入ってきた。
- 時間が過ぎても親同士でおしゃべりしたり、子どもたちも遊び続ける姿が見られ、ここが癒しだったり、居心地のいい場になっているのだなと感じた。
- 前回より人数が少なかったように感じたので、前よりきゅうくつ感を感じることなく、さらに居やすい空間になっているように感じた。
- 集中力があまりないためか、なかなか教材に関心を向けてくれないような…。どのようにすればこちらに関心を向けてくれるのか、課題ですね。
- 図工の授業で、環境設定ということでやってみたのだが、ウレタン積み木を低く並べたことで、2歳ぐらいの子たちが喜んでよく遊んでいたように思う。
- お母さんたちがとてもおおらかで、一緒に子どもの行動を見て、笑っていた。
- 4ヶ月の赤ちゃんも抱っこできる機会があった。
- いろいろな年齢のこどもがたくさんいて、とても楽しかった。
- おもちゃも様々なものがあり、遊び方もたくさんあって勉強になった。
- 環境構成等も工夫がしてあって、見ているだけで楽しかった。
- すごく暖かい、自由な雰囲気だと思う。
- ビニールプールの中のボールで遊ぶのがすごく人気で、みんなとっても楽しそうだった。

- 最初はなかなか関わることが、個人一人としかできなかったけれど、数人のグループで遊んでいる輪の中にも入れて、子ども同士のやりとり、関わりの姿も見られて、一緒に楽しい時間を過ごせた。
- 幅広い年齢層にもかかわらず、子どもたちみんなが楽しめる環境が十分に用意されていて、一緒に遊んでいてとても楽しかった。
- お母さんたちのおしゃべりは日頃のストレス解消になると思うし、子どもたちはお友だちと関わることによってゆずりあい、思いやり、優しさ等、大切な感情が芽生えて育っていると思う。
- だれか子どもが泣いてしまっている場合でも、他の子のお母さんがあやしたりしている様子を見て、とても居心地の良い（お母さんたちにとっても子どもたちにとっても）空間になっているのではないかと思った。
- 子どもの年齢によって、できることとできないことがあるということがよく分かった。できなくてもお母さんと一緒にやることですごく楽しめていた。
- コマ作りも、お母さんたちと一緒に楽しく参加してくれ、子どもたちが描き足りなくて裏にまで描いてくれたりして、子どもらしくて（自分たちでは気付かなかったので）、実践するといろいろな発見があってよかった。
- お母さん方が話しかけて下さったり、子どもが発見したことを共有しようと私を振り返ってくれたり、とても楽しかった。
- 人形を使った手遊びをするということで、小さい子どもさんにも分かりやすいように、ゆっくりやることを心がけた。もっと子どもと一緒に思いきり楽しんでできたら良かったと思う。見せただけになってしまった気がするので、次に生かしたい。
- 想像以上に子どもさんがいたことと、（幼稚園）ホールが広かったので後ろの方の子どもさんが楽しめたかどうかが気になった。
- 子ども一人一人と関わる時の自分、集団になった子どもたちと関わる時の自分、根本としてのものは変わらないが、接し方、呼びかけ方に違いがあり、もっと工夫してできたらと、とても勉強になった。
- 人形を出して子どもたちが反応してくれたことがうれしかった。
- こんなに小さい子たちと触れる機会があまりないので、とてもいい機会になった。どんなものにも興味を持って、楽しそうな顔が見られると、すごくうれしくなる。
- 未就園児ということで、人見知りもあり、一緒に遊びに入るまでが難しかった。でも、お母さんと3人で少しずつ仲良くなって、積み木を積んで「やったね！」とパチパチ手をたたいて笑いあったりしたときは本当にうれしかった。
- お母さんのひざの上で真剣に見ていてくれる子どもなど、いろんな子どもがいて、みんなの表情を見ながらやるのがとても楽しかった。
- 親子で触れ合って体操をするという姿は、実習でもなかなか目にしないので、今日はとても貴重な体験だった。あまり興味を示さない子、泣き出してしまう子もいたが、お母さんに優しく接してもらって、とてもうれしそうな子どもの笑顔が見られてよかった。
- 今日は（幼稚園の）遊戯室だったので、広くて子どもたちがのびのび過ごせているように思った。

- 今日はリズム体操をたくさんできて、知らないもの(ぐるぐる)も一緒にできてよかった。新しい子も増えて、だんだんつながっているってるなあーと感じた。
- 何回も来てる子は慣れてきて、思いきって遊んで、おもちゃの取り合いで喧嘩もするようになってきて、友だちっていう世界も見え始めていると思う。
- お母さんと一緒に体を動かしている子どもたちの笑顔がとてもかわいかった。
- 乳児と接する機会が少なかったので始めは緊張したけれど、顔を近づけたりするだけで喜んだりしていて、こちらから接していくことが大切だなと思った。
- 遊びを提供する側が楽しい雰囲気で行うことで、子どもたちも楽しめるものになるのだと感じた。
- 私は子育て支援にすごく興味があるので、様子などをみることができてよかった。お母さん方同士がお話をして相談しあったり、楽しく過ごすことはとても必要なことだと思った。
- 一つの場所にいろんな月齢、年齢の子が集まっていて、おもちゃを貸してあげたりする姿が見られた。また、会話を楽しんだり、抱っこして触れ合ったり、年齢によって関わり方が違ったので、よい勉強になった。
- どのようにして家で子どもとお母さんが遊んでいるのか、想像することができ、子どもたちの楽しそうな顔も見られて、親と子どもの関係をうまく援助して、親の不安を取り除いてあげることができるようになれるといいなと思った。
- お母さん方がお互いに子育ての話をしたり、職員の方からおもちゃの紹介をしてもらっていたりという様子も見られて、"子育て支援"を肌で感じられたように思う。
- 親と子で遊んでいて、子どもたちの表情はやはりお母さんと一緒だからか、落ち着いていて、とても楽しそうだった。チラッとお母さんの様子を見てイタズラをしようとしたり、得意げな顔をしてみせたり、見ていて笑ってしまった。
- アンパンマンの手遊びは、親子ともに参加していただけたのでよかった。お母さんと子どもが一緒にできる手遊びをもっと探してみようと思った。
- 赤ちゃんを抱っこして泣かれてしまったので、もっと勉強しなくてはいけないなと思った。
- 子どもたちとスキンシップをとったりすることで、少し距離が縮まったような気がした。
- 小さい子たちだったので、どのように自分から関わっていったらいいのか分からなかったが、抱っこされているときは皆にこにこしていた。
- まず、7ヶ月の子と接した。足や手の力がもうしっかりしていて、驚いた。笑顔で話すと笑顔で返ってきて、すごくうれしかった。
- 4ヶ月の子と7ヶ月の子を初めて抱っこさせてもらった。泣き出してしまい、「立ってあやすといいよ」とアドバイスしてもらい、やってみると泣き止んでほっとした。抱き方もよく分からず、小さい赤ちゃんともっと触れ合っていきたいと思った。

資料4　子育て交流会参加者の感想

- 自由遊びのほかに先生方や学生の方の「お楽しみ」がとても楽しかったです。
- 他のお子さんの成長や親子の接し方の違いを見ることができて、勉強になりました。
- おもちゃが充実していて、お楽しみもあり、とても楽しめる。無料で遊べるのでとてもありがたい。
- 学生さんの大きなかぶの劇が大変受けて、親子共に楽しめました。
- 学生さんが遊んでくれたときに、あまりに大勢の知らない人がいたため、大泣きしてしまったことがありましたが、回を重ねるごとに慣れていきました。
- 先生の遊びが、大人もとっても楽しかったし、勉強になりました。子どもも必死で見てた。
- 手作りのおもちゃがすごいなと思いました。先生方の子供への接し方を見習いたいです。
- 幼稚園ホールでの運動会が特に楽しそうでした。
- 家にはないおもちゃや遊具がたくさんあるので、子どもも楽しんでいます。
- どんぐり拾いなど、お友だちと一緒に一つのことをみんなで楽しめた。
- ふだんは同じ年齢くらいのお友達と遊ぶことがほとんどなかったので、子どもが楽しそうにしている姿を見られてよかったです。
- 大学生が、手作りの絵本などを作って見せてくれたこと。新聞紙破りはとっても楽しいと言ってました。
- 子どもがとても楽しそうで、私もうれしい。新しい友だちができました。
- 子どもが他の子と遊べて、楽しみにしているところが見れてよかったです。
- ホールで運動会でやるようなことをしたこと。学生さん達の劇なども楽しかったです。
- 家では物を作ってあげたりできないので、物を作らせてあげる事ができるのが良いと思いました。
- 手遊び等を教えていただけて良かったです。
- 親同士がたくさん話せた。子どもがたくさんのおもちゃで遊べた。お楽しみも大学生のお姉さんが初々しくてよかった。人数が多すぎたことも印象に残ってます。
- 夏の水遊びと、どろだんご作り、クリスマスリース作りが楽しかった。

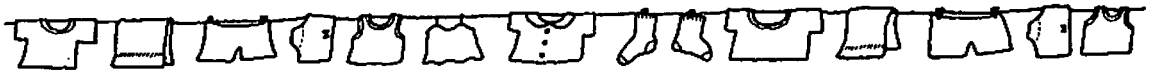
悩み・困っていること

- 食事の量（全然食べない）や協調性、乳離れができない。
- すぐにかんしゃくを起こすこと。
- 昼寝しなくなってから、冬場に体力を使って遊ばなくなったので…。
- 食物アレルギーがあり、給食で対応してくれる園が少ないので、悩んでます。
- 男の子なのに、おままごと遊びが大好きなので、もっと鉄棒、なわとびなど、外で遊具などを使い遊んで欲しい。

- 下の階の人に、子どもの走り回る音がうるさいと何度も注意されるが、どこまで子どもに注意すべきか。そんなに走り回ってないと思うが。
- お姉ちゃんがいないと知らないお友達と遊べない。
- 上の子の爪かじり
- まだ上手に遊べなくて、友達とのトラブルも多いので、そこが悩みです。
- たくさんの子どもたちがいる中に、自分から入って一緒に遊ぶことができない。
- おしっこを言わない。
- お友達がほしいです。
- 好き嫌いが多いのが悩みです。
- 主人の帰りが遅く、下の子に手がかかるため、上の子に淋しい思いをさせてる気がする。
- なかなか歯磨きをさせてくれない。

今後望むこと・気づいたこと

- スペースが少々狭いので、子どもが大きくなると行動範囲が広くなって、赤ちゃんを踏んでしまいそうでちょっと心配です。
- 家で作れるおもちゃなど、手作りでも出来る子ども用品など、うれしいです。
- これからも参加させていただきたいです。よろしくお願いします。
- できるだけ毎週やってほしいです。
- 子ども同士で遊ぶ機会を作っていただくとうれしいです。
- ホールでは後半は飽きてしまうので、外遊びを増やしてほしい。
- 親同士が一つの輪を作り、悩みなどを話し合えたら、もっと楽しくなり、お友達になれたりするのでは？と思います。
- このような場のおかげで、知り合えた方といろいろ話せて良かったです。子どももいつもはできない子ども同士のかかわりが持てて良かったです。



Ⅱ 保育実践報告

ピカピカどろだんごの魅力 ―静かに広がるブーム―

桜花学園大学　田中義和

京都教育大の加用文男さんが、2001年にNHKの番組に出演し、「光るどろだんご」が一躍脚光を浴びました。当時は、一般の新聞や雑誌などにも取り上げられ、「タモリ倶楽部」や「探偵ナイトスクープ」などのバラエティ番組や、「はぐれ刑事純情編」にも「安浦刑事と光るどろだんご」なる回まであり、「光るどろだんご」ブームとでもいえる時期がありました。日本泥だんご科学協会(ANDS)も当時発足しました[1]。

最近は一時期ほど、マスコミに取り上げられることはなくなりました。しかし、保育園に実習に出かけた学生たちが、実習園で「どろだんごはやっていたよ」と報告してくれたり、また、保育関係の研修会でどろだんごづくりの指導を依頼されることも年々増えてきおり、保育の現場ではピカピカどろだんごが静かに広がってきているように思います。

土への関心

ピカピカどろだんごは、テレビのバラエティ番組にもとりあげられているように、保育界にとどまらず広く社会的にも関心・興味をもたれているようです。この背景には、一つは近年の「土」への関心の高まりがあるように思います。建築の分野では土壁が再評価され、古くからある左官屋さんの技術が注目されています。ピカピカどろだんごも、左官屋さんの塗り壁の技術を応用した作り方も開発されています。また、芸術の分野でも土から作った絵の具を使ったり、土を素材に多様な作品が現れています。中でも注目されるのは栗田宏一さんの仕事。全国各地で土を採集し、干してフルイでこし、土のコレクションをひたすら作り出しています。そのやさしい多彩な土の色の世界の豊かさは驚くばかりです[2]。有機農業や土に棲む微生物の薬剤への応用など、農業や自然科学でも土への関心が高まっているようです。

情報化社会が進展し、コンピューターやインターネットを通して生活のあらゆる分野にバーチャルな世界が浸透してくる中で、身近にある自然の素材である「土」が注目されてきているのは興味深い現象のように思います。

ピカピカどろだんごの魅力

ピカピカどろだんごの魅力はなんといってもその輝きです。ごく普通の土と水からあの鏡のように光り輝く表面ができるのは感動的です。小学生に見せると、絶対にだんごの表面に何かを塗ってるにちがいないと、なかなか土だけでできてると信じてもらえないこともあるくらいです。

土や泥を磨いて光らせる遊びは、どろだんご以外にもいろんな形で見られます。砂場で使うママゴトの茶碗をひっくり返して、その窪みに湿った土を入れて、その表面にサラサラの砂をかけて磨いたりする遊び

も見かけます。また、地方によっては「しんだし」といって、同じように湿った土を磨く遊びがあるようです。

それと同時に忘れてはならない魅力は、触覚の快感です。ピカピカどろだんごを見せると、必ずといっていいほど「触ってもいいですか？」と聞かれます。実際に手でさわってその表面の感触を確かめてみたくなります。何か身体の中にある触感覚が刺激されるのです。泥をにぎった時の、あのニュルッとした感じ、その泥をしぼって芯を作ったときのガシッとしまった手触り、芯にかけていく乾いたサラサラの土の気持ちのよさ。さらに手にサラ粉をつけてだんごを磨いていくときの手のひらのあの感触。みがいていくうちに、ゆで卵の表面を固くしたようなすべすべ感が出現。文字通りの「手の快感」であり、「手の快楽」といってもいいと思います。

人間の五感といわれるものの中で、今、もっとも使われなくなっているのは触覚ではないでしょうか。手で触って確かめるのは、乳幼児期には大切な認識の手段ですが、大人になるほど、ほとんど使われなくなっています。コンピュータやインターネットで駆使されるのは、もっぱら視覚や聴覚です。バーチャルな世界の、ふわふわとした「つかみ」どころのない世界に対して、触覚の世界はしっかりとした存在感のある「つかみどころ」のある世界で対照的です。どろだんご魅力の中には、こうした現代人の触覚への渇望のようなものも垣間見えるように思えます。

子どもよりも保育士がはまるどろだんご

いろいろな保育園でどろだんごが取り組まれていますが、子どもはもちろん楽しんでいますが、子どもより保育者がどろだんごにはまっていることがよくあります。子どもが夢中になって遊んでいる園にはどろだんごにはまっている保育者の姿が必ずといってよいほどあります。

研修会でどろだんごづくりに励んでいる保育者の表情はとても生き生きとしています。昨年、本学を会場に愛知県現任保育士研修が開かれました。そこに参加された県内の保育園の園長・主任の先生方たちから、時々リクエストがあってピカピカどろだんごをいっしょに作っています。たいてい日曜日の午前中くらいに集まっていただくのですが、休日返上でみなさんどろだんごづくりに励んでいきます。そのときの夢中になってどろだんごを作る先生方の表情は、子どもそのものです。

このどろだんごをつくる遊びは、おもいっきり大人に童心をよみがえらせるという点でも特別なものがあるように思います。思い切り楽しく夢中になる時間を共有することで、後で紹介する一宮市立浅野保育園の先生方に見られるように、子どもと保育者の共感にとどまらず、どろだんごを通して保育者同士の共感が生まれ、職場の人間関係も心地よいものになっていくことがあります。また、この後に掲載される武豊町の山本先生の実践のように、保育者と保護者の共感、さらに地域の中学生など園外に共感が広がっていくのも興味深いものがあります。

子どもと遊ぶ中で、子どもと大人、周囲の大人たちに童心を媒介にした共感とコミュニケーションを作り出していく、そんなピカピカどろだんごには、子育てや保育の原点とも言える大切なことが含まれていると思います。

最後に昨年学生たちとどろだんごづくりに出かけた一宮市立浅野保育園の高橋先生から、その後の園での様子を報告していただきました。

泥だんごだより　　一宮市立浅野保育園　　高橋芳子

園長先生は、あれ以来、夢中になってだんごづくりに励んでいます。

あの後、新しく「まさつち(真土？)」が購入され、あの時の築山の上にさらに土がかぶさりました。今度来た土は、赤い土で、かなり粘土質のようにみえます。子どもたちはその上に乗って駆けおりたり、ほじくり返したりといろいろ楽しみました。

年長児は運動会の練習の合間をぬっては、家から持参した「マイタッパー」とタオルで大切に保管しながら、何度もだんごを作っています。　大きな目の細かいクサミで、その赤い土をふるってサラ砂をつくり、バケツに溜め込んでは、思い思いの場所に保管したり、出したり、小グループの仲間うちで共有し、おしゃべりをしながら、管理、使用しています。

年中児や、年少児も、こうした職員や、年長児の姿が影響し、同じように築山の周りで、土をこすり、ふるいにかけてサラ砂を作り、砂場の砂と山の土に水を混ぜては「ねえー、このくらい？」と、団子の芯を作る土の混ぜ具合を、園長先生や高橋、年長の「だんご名人」と言われるM君、T君などに確認したり、調合を手伝ってもらったりして作っています。年中児は、牛乳パックで作っただんご入れにナイロン袋に入れただんごをしまっています。年少児は、ナイロン袋に入れて、下駄箱の上に並べ、年長児は袋に入れたり、タオルにくるんで「マイタッパー」に入れて家で続きをやると、持ち帰っています。

女児の中からも、きれいな球体で少しだけ光るだんごを作った子が数名出ました。園長先生から、クレーターのできてしまっただんごを譲り受けたSちゃん。「これは、自分で作ったのじゃないから、だんごコンテストにはエントリーできないよね」と言われ、「先生、Sねー、うちでちゃんと自分でだんご作ってみたら、つるつるだんごができたよ。これならエントリーできるでしょ？」と、子どもなりに自分の力を試そうという気持ちも見えてきました。

一番つるぴかを作った「だんご名人」は、どこで仕入れた情報なのか「先生、だんごに色つけるといいんだに」と、嬉しそうに「マイタッパー」をそっと開けて見せてくれました。そこには色鉛筆で塗った『虹色だんご』が・・・・しかも彼は人一倍雑い仕事をすると定評のある子で、まだらに色鉛筆で塗った後が残っていて、「ん～？？？」と思わず首をかしげてしまいました。「だんごの色は、使う土で色が変わってくるって、田中先生に教えてもらたよね？」と私。今度は当のM君が「ん～？？？」でした。次に作るだんごが楽しみです。

ある日、年中児に呼ばれた私「なあに？」と聞くと「あのね、たかはしせんせいって、だんごつくるの　なかなかじょうずなんだね」と誉められました。年中児にもかなりきれいな球体のつるつるだんごが作れる子が出てきて、だんごつくりの面白さと、難しさが分かるようになってきたのでしょうか。

でも、今一番乗って努力を続けて(続けられる条件を持って)いるのは園長先生です。園長先生の机の上には、数個のどろだんごが、それぞれの袋に入れられて、空き缶の上に鎮座しています。「保育士たちが、運動会のための作業で残って仕事をしているのに、自分だけさっさと帰るわけにはいかないからね」と、5時過ぎに、どっかりと腰をすえてだんごづくりをしているのです。

昨日の園長先生のつぶやき・・・「手を怪我していたので(それでもだんごを作りたかった？)ゴム手袋をは

めて、だんごをこすったら、つるつるになって光ってきたんだよ。どろだんごは奥が深いわ～」ですって。

私のだんごは、クレーターができると、年中や、年少児、兄姉の送迎について来た小さい子達が、泣いているのを見つけて「これあげるから」と差し出しています。今作っているのはなんとかクレーターはできていないのですが、運動会の準備でしばらく蓋を開けていないので、カビが生えているかも・・・・。同じ年長担任のS保育士もしばらく蓋を開けずにしまっておいたら、タオルに黒いカビが点々と・・・子どもにまで「くせえ～！」と鼻をつままれてしまいました。

主任のA先生は相変わらず、田中先生に作っていただいただんごに固執し、大切に養生中。こちらは、どんなに忙しくても必ず一日に一回は出して手のひらで大事に磨いています。

年少担任も、園長先生に「先生も作ってみやあ～」と言われ、まわりからも「おもしろいに～。先生なら絶対に良いだんごができるわー」とのせられて「そうですかあー。じゃあ」と、作っただんごが机の上に。

年中担任も二人で子どもの輪の中に入ってだんごつくりをしています。子どもにも、波紋は広がっていますが、どちらかと言うと職員の間で、ブームになっていると言えそうです。

注（1）日本泥だんご科学協会（Association of Nippon Dorodango Science 略称 ANDS）

http://www2.ocn.ne.jp/~tutimizu/

（2）栗田宏一　「土のコレクション」　フレーベル館　２００４年

たかが泥だんご　されど泥だんご

――ただの泥だんごが、磨き方次第で光だす！――

知多郡武豊町立中山保育園園長
山本春美

はじめに

2001年度より、保育の中に光る泥だんご作りを取り入れ、作り方の研究や発表をさせていただき、6年目になりました。

1年目は、南保育園にて、子どもと保育士が手探りの状態から光る泥だんごを完成させてきました。2年目は東大高保育園に転勤し、子どもたちの泥だんごを見ながら、何とか光るように環境を整えたいと思いました。3～4年目は、園庭の土以外の「作りやすい土」探しや、制作時間の短縮を研究し、園の外では、美浜町立野間小学校の総合学習で、5～6年生と光る泥だんご作りを経験させていただきました。5年目には、同じ野間小学校の「親子学級～ふれあい講座」の光る泥だんご作りコーナーを担当させていただきました。東大高保育園で初めて、園庭の土ではない、山土（赤色）で光る泥だんご作りをしたり、さらには富貴中学校3年生（選択家庭科）と保育園の園児と一緒に泥だんご作りに取り組み、いろいろなところに輪が広がって行きました。6年目は転勤になった中山保育園で、子どもたちの泥だんごを見たり、園庭の土を観察したりしながら、じっくり腰を据えて取り組んでいこうと考えています。

今回は、最初に取り入れた南保育園の光る泥だんごの実践を中心に、保育園での中学生との交流の報告をさせていただきます。

1　園庭の土でできるね。　2001年度　南保育園での実践

光る泥だんごとの出会い

2001年6月に、NHKテレビ「にんげんドキュメント“光れ泥だんご”」の番組を見ました。新聞や『現代と保育』誌（ひとなる書房）で興味・関心を持っていた光る泥だんごをなんとか南保育園でも子どもと作りたいとの思いが強くなりました。番組の中で朱い実保育園の子どもが真っ黒に光っている加用先生（京都教育大教授）の泥だんごをもらうよりも、自分で作っただんごをいとおしみ、大事ににぎって手から離さない姿や、壊れても、くやしさをこらえてまた作り出す姿にも感動させられました。

つるりとして少し光るだんご発見

夏に入り、暑い毎日です。南保育園の樹齢18年のけや木が、葉を広げ涼しい木陰をつくってくれています。その下で泥のだんごに砂をかけてこするのですが、今まで通りの白いだんごです。気持ち、表面は少し滑らかになってきました。そんな矢先、岩田保育士に「少し光ったんだわ、見てみる？」と言われ、なるほど部分的にだけど表面がつるりとして光っています。「これはすごい！！」。

試行錯誤の9月

光る泥だんごにもうすぐ会えるようなワクワクした気持ちで、浅野主任保育士と岩田保育士と「こうするといいかな？」と作りながら感想を交わしていると、大切なことに気付きました。泥だんごは、常に「ビニール袋に入れて湿度を保つ」ことでした。完成までに乾燥させてしまっては、今までの白いカチカチゴツゴツだんごなのです。

子どもが初めて完成させた光る泥だんご

4才、5才児の全員で「にんげんドキュメント“光れ泥だんご”」のビデオを見ました。ビデオを見た子どもが「ビデオでは、先生（加用先生）が、子どもたちに教えていたけど、南保育園では子どもが先生に教えたね。」と言っていたことを、後になって聞きました。なるほど、子どもの言う通り、9月27日に南保育園初の理想的な光る泥だんご1個目は、5歳児のN子が完成させました。それは皮をむいたゆで卵のような全体がつるりとしたつややかなだんごでした。私は、身近でつるりとした光る泥だんごを見て、触らせてもらったのは、生まれて初めての経験でした。9月に泥だんごを完成させた4人の子に脱帽です。

園庭でだんごを磨く子どもたち

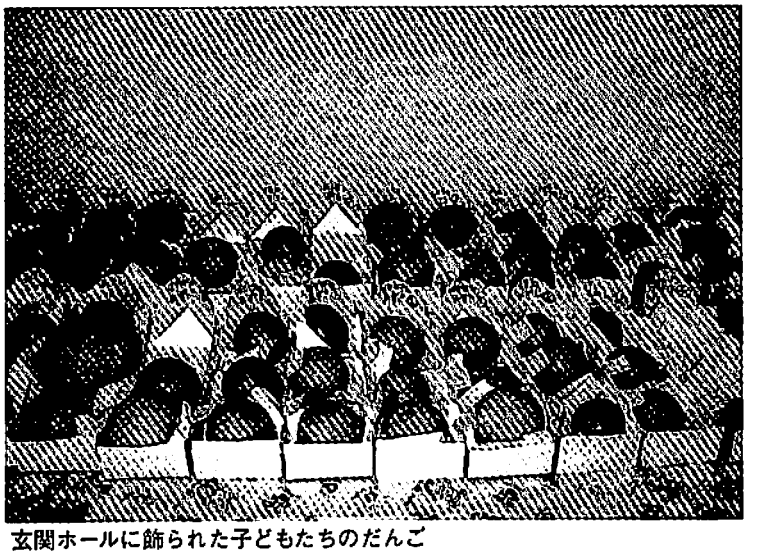
9月に完成した泥だんご・・・4個

「ビニール袋、ください」「布、ください」

運動会を目前にひかえ、泥だんごづくりは、休むことなく続けられ、運動会が終わって秋たけなわの10月うれしいお世話が続きました。早くて3日で完成する泥だんごは乾燥しないように、そのつどビニール袋に入れて、子どもの靴箱にある牛乳パックケースにしまっていました。「ビニール袋、ください」と言

って保育士からビニール袋をもらうと、落とさないように慎重に袋にしまい、上を結び、自分でできない子は結んでもらっていました。3日目の完成に近づくと「布、ください」と言いに来ます。言えない子も促がされ、自分で言えました。「いいよ、もう磨くの？よかったね」と、保育士もうれしくて、布を渡すと、受け取る子どももウキウキ・ドキドキの表情をしながら木陰で磨き始めます。

ある時、5才児のM子が、「布で磨くのって楽しいね」と磨きながら、だんだんと、つやつやピカピカになってくる泥だんごを、うれしそうに、友達に見せては、また磨いていました。その楽しさが、共感でき、私も幸せになりました。


玄関ホールに飾られた子どもたちのだんご

「泥だんご飾ってください」

色も、大きさも、つるつる程度も、同じ物は一つもなく、一人一人の可愛い手で、いとおしみながら、大事な宝物が作られてきました。その泥だんごを、せっかくなので、1月の作品展にも飾ることにし、それまでどこでどのように保管するとよいか、浅野主任保育士と考えました。玄関前の広い廊下を利用して職員室入り口に左右に並べることにし、座卓に包装紙をかけ、その上に泥だんごを入れる牛乳パック（1／2船型ケース）を並べ、1個1個の泥だんごの下には座布団（布）を敷くことにしました。日付をケースに貼り、ちょこんと布に置かれた泥だんごは、子どもと一緒に飾るのです。泥だんごを完成させると、子どもは、泥だんごを握って「飾ってください」と、職員室へ戸外から入ってきます。その場にいた保育士が「いいよ。できたね。よく光っているね、すごいなあ。」と完成を喜び、子どもをほめながら廊下に一緒に向かって、ケースに入れていきます。子どもは十分、達成感を味わうと、ニコニコしながら職員室に戻り、戸外へとび出していきます。ひき続き、もう1個作り始める子も入れば、ドッジボール、丸・三角・四角鬼ごっこなど好きな遊びをやり始める子もいます。

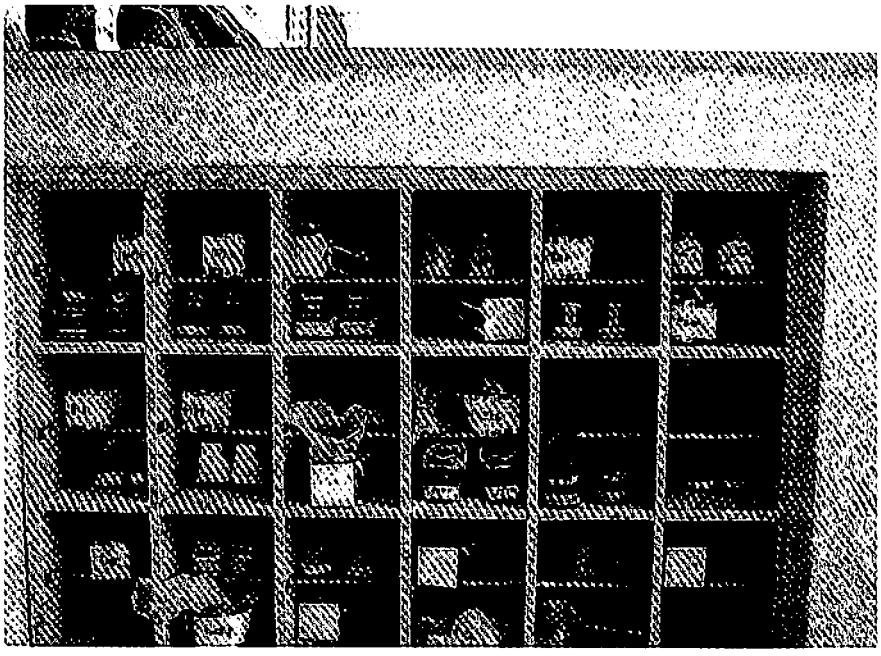
・10月に完成した泥だんご・・・39個

ビデオ「光れ泥だんご"」の貸し出し始まる

「子どもが夢中になって作っている泥だんごのビデオを貸して下さい。」と言われるお母さんの声を、どうしようか話し合い、岩田保育士の個人持ちのビデオから園所有のビデオを持ちました。子どもと泥だんごの「よき理解者になっていただけるためなら」という目的で、借りたい方が借りられるようにしました。7名の方が借りていかれました。（桃組4名　緑組1名　ひばり組1名　他1名）

保育参観日に親子で作る　4才児桃組　11月12日

「しっぽとりゲーム」を終えて、自由に遊ぶ時に「今、子どもが好きな泥だんごをお母さんも一緒にやりませんか？」と、担任が声をかけました。すると、全員の方が30分間、子どもとそれぞれに1個ずつ握り始め、砂をかけて、ビニール袋にしまわれました。お母さんの作った泥だんごの続きは、子どもが引き受け



牛乳パックでつくった箱の中にはビニール袋にいれた泥だんごが

て時々、「こんな風になったよ。」と子どもの方から見せていました。「先生！！はまるね。」と言われるお母さんもいて、結構、関心を持たれました。12月17日、Ｉ男が「お母さんとＩ男が作ったんだよ。」とうれしそうに職員室へ持って来ました。気持ちの通じ合った親子合作泥だんごの完成です。

家庭の庭で泥だんご作り、そして園でも泥だんご

保育士が誘っても作らなかったＴ・Ｓ男は、園で泥だんごを作っている子のそばで、じつと手元を見ている日が続きました。その後、家でやっていたようで、お母さんとこんな会話がありました。

お母さん　「兄弟で泥だんごをつくっているのですが、Ｔ・Ｓ男だけがビニール袋に入れて、玄関の隅などに隠しているのです。」

保育士　「へえ、そうだったのですか。」

お母さん　「兄は、門柱の上にだんごを置いているのですが、あの子だけは、玄関の隅で、違うのです。」

家で作ったことが自信につながり、園でも作ろうという気持ちが現れてきました。「こなかける？」と、保育士に聞きにきたり、保育士の完成しただんごに手を出して、触るようになってきました。泥だんご作りを通して、園と家庭が、子どもの行動をお互いに理解する機会につながりました。

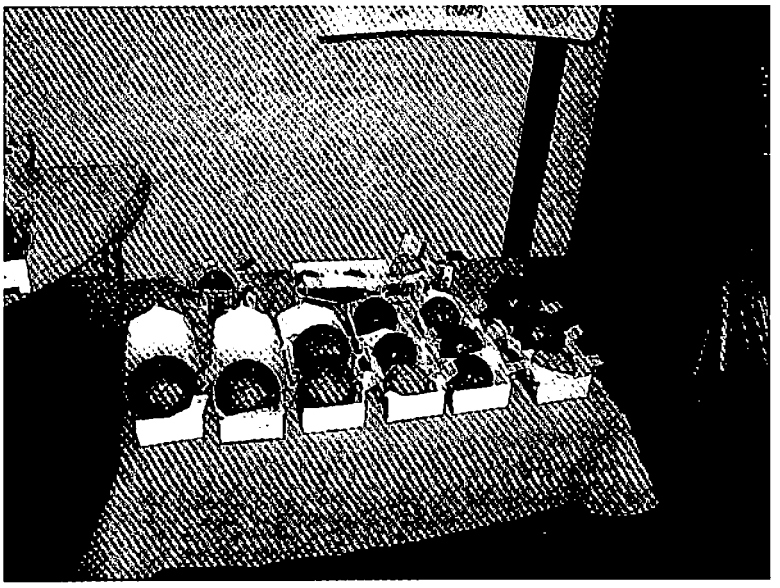
また、泥だんご作りでドッジボールのメンバーが足りず友達に誘われました。強い子がいなく入りやすい状況もあったためか、ドッジボール入ることができ「Ｒちゃんのボールだったよ。」と、取り合いのボールをはっきり言えたり、積極的にボールを取りに行ったり、楽しんでいる姿がＴ・Ｓ男に見られてきました。

保育士もとりこに。そして赤・黒・緑の泥だんご

9月27日、南保育園初の全体に光る泥だんごは、子どもの手からでき、保育士の中からは、つるりとしただんごは出てきません。しかし、やりだすと実に楽しく、大人もはまっていきました。

10月17日、石川所長先生の来園日です。晴天で「だんご日和り」。雨がしばらく降らず、さら砂も豊かにあります。子どもの大好きな石川先生は、子どもたちのアドバイスで泥だんごを作りあげていかれます。さら砂をかけて、次の11月の来園日に、ビニール袋から取り出し布で磨き始めるとすぐに、浅野主任保育士の「光ってる！」の声。先生はさっそく子どもたちに見せに行ってくださいました。

「石川先生のは、光度3だ」「4だ」と騒ぎ始めた子どもたち。多くの子どもの目が輝きました。「石川先


玄関ホールに飾られた職員の泥だんご

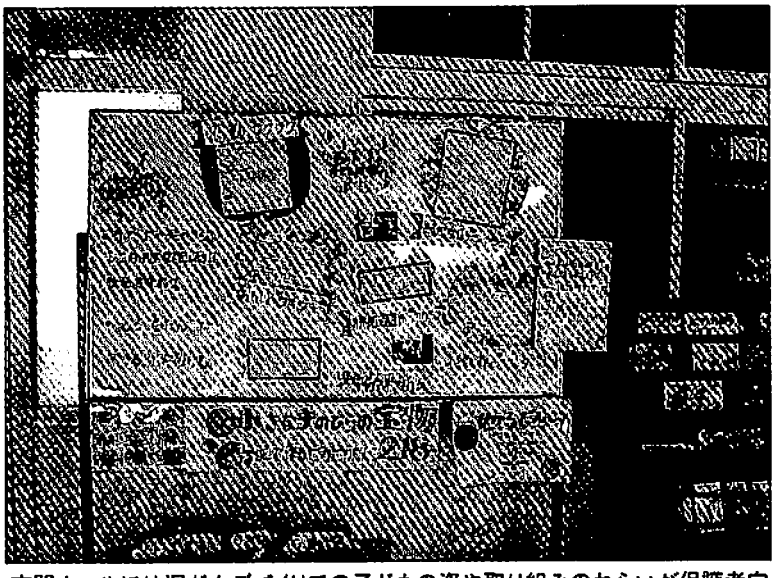
生に続こう！！」もちろん私たち保育士も。・・・1つ、2つと光る泥だんごが出来上がると、何ともいとしい気持ちで、人に見ていただきたく、達成感も頂点に登ります。その内に、波のように職員に広がり石川所長先生と職員7人の泥だんごが飾られてきました。

赤色のだんごはレンガの粉を混ぜ、黒色のだんごは木炭を混ぜ、緑色のだんごは食紅を混ぜてあります。廊下を通るたびに、子どもたちはだんごの数が増え、色々なだんごに魅せられ「どうやって作ったの。」と聞いてきます。得意になって説明する大人はもう子どもの年齢に下がり、「一緒に作ろうね。」と心からだんご仲間に呼びかけてしまうのでした。

・石川所長先生と職員の泥だんご・・・31個

見て！見て！　降園時は親子で泥だんごの見学

泥だんごを完成させると、その日お迎えの時に、子どもがお家の人に話をし、そのまま「ちょっといいですか、だんごを見せてください。」と親子づれで訪れます。「いいですよ。○○ちゃん今日光ったのできたものね。」と話しながら職員室を通って廊下の作品展示場へ行きます。そこで、子どもたちは、お父さんやお母さんやおじいちゃんやおばあちゃんからほめてもらっています。「すごいね！！」他のだんごも、色々見ていかれます。


玄関ホールには泥だんごづくりでの子どもの姿や取り組みのねらいが保護者向けに掲示されている。

残る7人の子に完成させてあげたい!!

この泥だんごづくりは、課題活動ではなく、朝登園してからの2、30分や、給食前や、午後からの戸外遊びの時に、作りたい子が作ってきました。

11月20日を過ぎ、5才児緑組で、完成していない子が7人いました。手術で休んでいたS男もその一人。S男が鉄棒で足をぶっけ、冷やしに職員室を訪れた時に、私から話をしました。

山本　「ちょっと泥だんご見ようか。」

S男　「うん。」

山本　「たくさん並んでるでしょ。いろいろあるでしょう。」

S男　「うん。これK・S君のこれ赤色。」

山本　「あと緑組さんで7人作ってない子がいるのだけれど一緒に作ってここにならべようか」

S男　「うん、明日作る。」

山本　「明日いっしょにS君と作れるのうれしいな。楽しみ。」

そしてS男は帰りに、お迎えのおばあちやんに「明日だんご作るのだよ。」と伝えていました。

翌日は「○○君！だんご作るぞ。」と友達を誘っていました。何人か集まったようで、その内に浅野主任保育士が「S君、園長先生にだんご作ろうと言っておいで。」と言う声が聞こえてきました。なんとうれしいことでしよう。7人中4人が集まって来ました。そして翌々日、完成させていきました。4人は、一度作ったが割れてしまったので、もう作らないと決めていたようです。

そして残りの3人の子は登園が遅かった子と、「だんごやらない！！」と言い続ける子と、お休みの子でしたが、隣にぴったり接して、見守り、助言、援助を続けて2人完成しました。「だんごやらない！！」と言う子には、私も、どうしようかと思いましたが、同じ緑組のM男が「おまえ、だんご作ってみろ！」と言ってくれましたので「いこう」と座っているT男を抱き上げ、けや木の方へ手を引いていくことができました。1個目が壊れましたが、また泥をにぎり始め「だんご作り、おもしろい。」と発言し、光りの見える泥だんごを完成させました。子どもを決めつけて見てはいなかったか、反省させられました。こういう行動をするのはなぜだろう、と発想を広げてみることを欠かせないようにしたいと思いました。

あと一人の子は今までに作っていましたが、完成せず落としてしまったり、お休みが続いたり、寒くなり体を動かして遊びたく、まだ完成していません。どんな関わり方をしていきましようか。じっくり、ゆっくり子どもに合わせてやっていきましよう。

・11月に完成した泥だんご・・・113個

自然界から学ぶもの

初の光る泥だんごを完成した子のお母さんは、「子どもが泥だんごを作るから、朝早く保育園に行くと言うのです。」と言われ、その時の子どもの気持ちの高鳴りが伝わってきました。

また、子どもは遊ぶ中で、泥・水・土、さらに砂・けや木・風・お日様・雨・曇・霜の自然を敏感に感じてきました。

「明日、雨が降ると、泥だんごが作られないから、今日のうちにさら砂かけをよくやっておこう。」とか「霜で午前中は土が湿っているから、昼からしか砂をだんごにかけられない。」など。

寒い日は「泥だんごお休み」。風が強いと砂が飛ぶし、じっとだんごを作っていると寒く、ドッジボールや丸・三角・四角鬼ごっこに遊びが変わります。

牛乳パックに入れた水を、土にかけ泥にし、空気を出すようにギュッギュッと力を入れて、丸くし砂をかけて作る光る泥だんごは、けや木の根元で遊びます。徐々に、土がなくなり根が現れてくると、正門横の花壇周囲のもり上がった土を子どもがおもちゃの手押し車で、運んでくれます。この土が南保育園では一番よいようです。

異年齢でのかかわりが育つ

遊びは、「模倣から始め、工夫を味わい模倣に終わる。」と思えてなりません。どこまでいっても、だれかを見て模倣を続け、いつしか自分のものになっている。またそれを模倣するだれかがいる。その中に5才児が、4才児が、3才児がだれかを手本としているし、壊れて困っていれば「こうするといいよ。」「こわれた？」と教えたり聞いたり、「おまえ、すごいな。」と年下をほめています。

涙を流して壊れただんごを集めている3才児のN子に、5才児のK男は「どうしたんだ？」と聞きました。他の子に「○ちゃんに、ひびのいっただんごはこわしん」と言われたことを教えてもらったK男は、「そうか、おれは、そう思わないなあ。」(ひびが入っても壊すのはよくない)と言っていました。割れたかけらの泥だんごを職員室に持っていくというN子に付き添ってくれるようにK男に頼みました。あとで見たところ、N子の割れただんごは、2個目の位置にきちんと飾られていました。

おわりに

子どもの目の輝きと、自らが作りたくて何日もかけて集中し、根気よく壊れても再び挑戦し、仕上げている姿や、園全体の様子から、半年間の「光る泥だんご作り」の文章を書かずにはおられなくなり、綴ってきました。また、来年も光る泥だんごを目指して遊びを続けていこうと思います。

泥だんご入れケースを自分の靴箱に片付けに来た3才児2人の話し声が職員室に聞こえてきました。「今度、光るかもしれんね。」「そうだね。」と。楽しみに期待しているS子とA子の響いた声です。保育に光る泥だんごを取り入れて、大成功でした。21世紀の幕明け、2001年度が南保育園にとって、じっくり、ゆっくりと園庭の土と水でできる“光る泥だんご作り”の幕明けとなりました。保護者の皆様や職員に感謝しながら、今を大切に未来を見据えて保育をしていきたいと考えています。

・12月に完成した泥だんご・・・24個

・9月～12月で完成した泥だんご・・・子ども245個　大人33個　全部で完成278個

2　富貴中学生と光る泥だんごづくり　2005年度東大高保育園

2005年度には富貴中学校3年生と家庭科の授業で泥だんご作りに取り組みました。

5歳児が光る泥だんごづくり　10月

白組担任の北条保育士は、その時のことを保護者へのクラスだよりで次のように書いています。

「せんせい　見て！ピカピカになってきたの！」と走りより、小さな手のひらにのった泥だんごを見せてくれた子どもたち。先日、さわやかな青空の下、泥だんご名人の園長先生といっしょにピカピカ泥だんごづくりに挑戦しました。

泥だんごづくりは、根気と努力が必要となるあそびですが、子どもたちは「光る」ことをめざし真剣に取り組んでいました。自分なりに目標をもち達成するために、あきらめずに取り組むという姿勢は、これから就学を迎えていく子どもたちにとって、また、大人となってからも大切なことであると思います。あそびを通して楽しみながら身につけている子どもたちです。

当日一言も聞きもらさないように、しっかり私のつくり方を聞く子どもの姿が見られました。そして翌々日には完成させてきました。

2週間後　小さな泥だんご先生が活躍

11月、毎週水曜日3回にわたって、選択家庭科の保育実習で3年生のお姉さんたち16名が来園しました。そのお姉さんたちに「こうやってやるのだよ。」とやさしく泥だんご作りをおしえてあげました。

お姉さんといろいろ会話しながら興味をもって取り組んでいました。また、自分たちが作った泥だんごを中学生に見てもらいながら交流していました。中学生も想像していた以上に光る泥だんごづくりは楽しかったようです。「壊れたときはどうしようと思っていたけれどとても丁寧に教えてくれたので助かりました」というおほめの言葉をいただきました。

子どもたちは、戸外あそびで3回にわたりじっくりと中学生とかかわりながら遊んでもらうことができました。

保育実習に参加した中学生のお姉さんたちが感想をよせてくれました。

私が保育園の園児だったころは、泥を丸めただけだったのに、今の園児はあんなピカピカの泥だんごが作れるなんてすごいなと来た時に思いました。園児はみんなすごく元気があってかわいい子たちがたくさんいました。その園児にわからない所やどれくらい砂をかけるなどたくさん聞いて、いろいろな事を話せたのでうれしかったです。

最初は泥だんごがそんなにきれいになるのか？って思ってたけれど、時間をかけて磨いていくにつれて、きれいになっていくのがわかってうれしかったです。また、子どもたちといろいろなことを話しながら、泥だん

ごをつくることが楽しかったです。園児は作り方をよくわかっていない私に作り方を教えてくれ「どうやるの？」と聞くと、「こうだよ。」とか「もっとこすらなくちゃだめだよ。」などと、アドバイスしてくれました。園児たちは私の泥だんご先生でした。

初め「泥だんご」をつくると聞いた時、手が汚くなる上、作っても意味などないのになと思いました。でも園長先生や園児のだんごを見た時、自分も作りたいと思うようになりました。園児たちが作り方を教えてくれたり、みんなで会話をしたり、だんごが徐々に出来上がっていくことがすごく楽しく感じるようになりました。

初めてあんなに固い泥だんごを作りました。初め見本を見せてもらった時に、こんなのつくれるかな？って思いました。あの泥だんごを研究し続けた先生はすごいと思いました。1日目はあと二日であんな上手に出来るか心配でした。でも、だんだんピカピカになって来たのはすごく感動しました。保育園の子も一緒にやってくれたり、教えてくれたのがうれしかったです。園の子ともいっぱい遊べて楽しかったです。

Ⅲ 保育研究報告

保育所における「家庭的な保育」について考える：0歳児保育の実践から

松本　博雄[i]

1. はじめに：問題の所在

保育所での乳児保育実践が論じられる際、「家庭的」ということばが用いられることは少なくありません。日本における乳児保育はそもそも、それまで一般に家庭における私事として営まれてきた育児の代替として、社会状況の変動と関連して実現されてきたという歴史的な経緯をもっています[ii]。このことを考えると、それを論じる代表的なキーワードとして「家庭的」ということばが挙げられるのは、そう不自然なことではないでしょう。

この「家庭的」ということばは、そもそも保育実践において具体的にどのような文脈で用いられているのでしょうか。まず挙げられるのは、施設保育の対概念としての「家庭的保育」です。これは、主に保育者の家庭などでごく少数の乳幼児を対象に行われる保育形態のことをさします[iii]。すなわち、ここでの「家庭的」とは、主に保育が具体的に実践される場に関連した概念であり、実態としての「家庭的」ということだと理解できます。

以上の整理に基づけば、保育所での保育は「家庭的保育」とは対照的な「施設保育」の一つとなります。しかしながら保育所保育について論じられる際にも、「家庭的」という用語は通常よく用いられるものの一つです。たとえば、ある一般的な乳児保育のテキストには、乳児保育における物的環境をどう設定するかという問題に対して、保育所は学校の延長線上ではなく、「家庭」の延長線上にあることが望ましいということ、また乳児の生活と遊びの場である保育室は、「家庭的」で明るく、あたたかい雰囲気を保つことを心がけたいということが述べられています[iv]。ここでの「家庭的」とは、保育所の環境構成における前提を表す概念として、物理的な意味での「家庭」と異なる意味で用いられていることがわかります。

保育所が子どもの生活を支える場であることを考慮すれば、保育所を代表とする施設保育においても「家庭的な環境づくり」が一つの鍵概念として論じられるのは当然のことかもしれません。しかしながら、物理的な意味では「家庭」と「保育所」は対照的なことばであることもまた事実です。では、そもそも家庭とは異なる施設である保育所において「家庭的」という概念が用いられるとき、わたしたちはそれをどのような意味として理解し、実践に反映させていくことができるのでしょうか。本稿では、保育所保育の中で用いられることの多い「家庭的」という概念を、具体的な保育実践のなかでどう理解し、展開させることができるかという問題について、特にそのことが問題となりやすい乳児保育の実践を参照しつつ検討したいと思います。なお本稿は、2005年6月16日に労働会館（名古屋市）にて行われた愛知県下小規模保育所連合会2005年度0歳児保育実践学習

会「こどもたち一人一人が無理なく保育園生活に慣れるために」(犬山さくら保育園2004年度0歳児クラスの保育実践：柴田由美子氏報告)についての筆者によるまとめを、本誌に合った形式になるよう加筆・改訂したものです。

2.「家庭的」という用語が意味するところ

先にも述べたように、乳児保育、特に0歳児を代表とする養護的側面の強い年齢期の保育について考えるうえで、「家庭的」という用語が何気なく用いられたり、一つのキーワードとなったりするのはよくあることかと思います。しかしながら実際の保育において「家庭的」とは何かを具体的に考えていざ取り組もうとしてみると、この用語の意味するところに戸惑う場合が少なからずあるかもしれません。たとえば愛知県下のある公立保育所では、「家庭的」な環境を構成するために、いわゆる「保育園らしい」壁面構成物を一切使用していないといいます。「家庭的」とはたとえばこのように、物理的な意味でできる限り家庭に近い環境を保育所において構成することをさすのでしょうか。あるいは「子ども—保育者」の間に一対一の関係をつくれば、それはすなわち「家庭的である」といえるのでしょうか。もしそうであるとすれば、家庭とは異なる保育所という環境において、実際にどこまで「家庭に近づけて」実践していくことができるのでしょう。いずれにせよ、「家庭的」という概念は、具体的な実践との関連で考えるほど、良くいえば奥の深い、別の言い方をすればとらえどころのない、多様に解釈可能なものであると思われます。

このように「家庭的」という概念を漠然と理解しているつもりでいても、具体的な水準で考えると急にとらえどころがないものと感じてしまう理由の一つは、それぞれの家庭における日常の実践が当然のことながら個々大きく異なることに関係すると思われます。このことを考えると、個々具体的な活動に対して「家庭的か、そうでないか」を問題にするという方向で議論を進めていく限り、「家庭的とは何か」という問題を整理するのは難しそうです。

では、保育実践においてこの「家庭的」という概念を理解するうえで、他に有効な方法はないのでしょうか。このことを考えるにあたって、愛知県下小規模保育所連合会2005年度0歳児保育実践学習会における実践報告者の「たとえば家庭で寝る習慣がない子どもがいたとして、では『寝ない生活』が家庭的かと考えるとそうではないだろう」というコメントは示唆的です。それは、「家庭的」ということを、家庭で行われている育児実践にできる限り具体的に近づける、という外見から理解しようとするのではなく、「快適さ」「安心」といった「子どもにとって家庭が(本来)果たすべき機能」という面から理解することだと考えることができるでしょう。ここで生じるのは、保育所において「家庭的である」ことを実現するために何ができるかを検討するための、次のような「問いの転換」です。すなわち「何をすべきか」という「手段」にかかわる問いを、「ある実践がこの子どもにとって家庭的になりうるのか」という「実践の機能」にかかわる問いへと置き換えるということです。これを図で示すと以下のようになります。

「家庭的とは」ということが検討される際には、「家庭に近い環境とはどのようなものか」というように、保育所で実践されていることが家庭での実践に具体的に類似しているかどうかを軸に考えられるのが一般的かもしれ

ません。たとえば「食事や睡眠にあたって各家庭で実践されている配慮と同様のものを、園においてもどう実現するか」ということです。このときに問題とされるのは、ある実践が「具体的な実践形態として」家庭のそれと類似しているかどうかということになります。これは、図でいえば①／②の部分に該当し、横軸を補助線として区分されます。

いっぽうで、形態として家庭と類似したことを保育所で実践したとしても、それが本当に「家庭的」なのかどうか、実際に迷いながら取り組まざるを得ない場合もあると思われます。具体例を挙げれば、たとえば家庭でおしゃぶり等を積極的に使っていたとして、それを保育所でも積極的に使うとすればすなわち「家庭的である」といえるのかどうか、または家庭において「起きるまで寝せておく」という育児がなされているとして、それをそのまま保育所においても実践するのが「家庭的」といえるのかどうか、などということです[v]。このようなとき、ある意味で「家庭的」な実践がなされているはずなのに、その一方で「迷い」が生じることがあるのは、何に起因すると考えられるでしょうか。

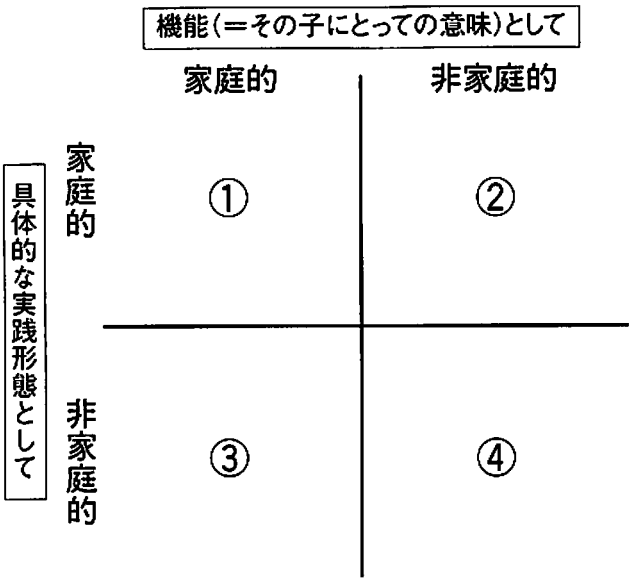


図　保育所での「家庭的な実践」を整理するための枠組み

このことは「実践の形態として家庭的」であっても、実際の機能、すなわち子どもにとっての意味としては家庭的ではない場合がありうることの反映として理解できるのではないかと思います。つまり、たとえ具体的な実践内容が家庭のものと同じであっても、それが保育所で実践される際には一人一人の子どもにとっては「家庭的＝安心／快適」をもたらさない場合がありうる（図中②に該当）ということ、更にいえば、仮に家庭とは実践の形態が異なっているとしても、一人一人の子どもに果たす機能としては「家庭的＝安心／快適」である場合もまたありうる（図中③に該当）ということです。「機能（＝その子にとっての意味）として」家庭的であるかどうかは、図でいえば縦軸を補助線として①／③の部分に該当するかで整理できます。家庭的ということを考え実践するにあたって「迷い」が伴うことが少なくないのは、このような「形態」と「機能」の問題が混同して考えられることに原因の一つがあるのかもしれません。

先述の0歳児保育実践学習会における報告では、実践の中で「一人一人の心地よい生活を考えてきた」という報告者の立場が紹介され、睡眠に関する取り組み、食事に関する取り組み等、「一人一人が快適に過ごせる生活とは何だろうか」という問いをもとにして、それぞれの子どもの快適さや生活リズムに合わせて具体的に工夫された成果がいくつか報告されました。このことは、家庭的という概念をその表面的な意味で理解するのではなく、機能と形態という視点から分類し実践する試みの一例だと思います。「家庭的」ということを子どもにとっての意味から整理することで、改めて実践を問い直すことが可能になるということです。

3. 保育所にて「家庭的な保育」を実践する際の視点

次に、以上の整理をふまえたうえで、保育所にて「家庭的な保育」を実践する際に必要となる視点は何か、それに基づいて構成される実践はたとえばどのようなものになるかを検討したいと思います。保育所における「家庭的」ということを検討するにあたり「形態」ではなく「機能」から考えるとは、子どもにとっての「意味」に着目する考え方と言い換えることができるでしょう。ではこの「子どもにとっての意味」をとらえるための手がかりを、実践のなかでどのように得ることができるのでしょうか。

「子どもたち一人ひとりにとっての心地よい生活」とは、ことばで表すのはたやすいですが、実際にこれに沿って実践することはそう簡単ではないと思われます。たとえば先の実践学習会における議論で具体的に出されたのは、「子ども一人一人のペースや好みに合わせて保育を構成したときに、このまま続いたらどうしよう？という迷いが生まれる」という指摘でした。一例として「睡眠のリズム」を挙げると、登園してからの朝寝をどれくらいさせるのか、という問題です。家庭での生活の延長ということを考えて時間を区切らず目覚めるまで寝かせておけば、いつまでも朝寝が続き、そのときは快適ないっぽうで、生活の区切りがつきにくい、昼寝ができないなどの姿になってしまうかもしれない。一方で時間を区切って起こす保育では、目覚めもすっきりせず気分よく過ごせないかもしれない、ということです。これに対して報告者からは、まずは「不機嫌で一日過ごすよりは気持ちよく寝させよう」ということを確認して、それをふまえたうえで「この子は何が気持ちいいのだろう」ということを追求してきたこと、また、いずれ整えていきたい睡眠―生活リズムへ向けて自分から起きるような配慮を試みていったこと、さらに実践全体に関わる問題として「ことばで伝えられない（年齢である）からこそ、気持ちをくんであげる」ことを手がかりにしてきたという旨のコメントがありました。このなかには、子どもにとっての「家庭的」な実践とは何かを把握するための要素が隠されていると思われます。

そもそもなぜ、家庭とは違った環境である保育所で「家庭的」ということが意識されるのかというと、それは「家庭」が「子どもにとっての快適さ」「気持ちよさ」という機能を果たしている、つまり「家庭的」とは子どもにとっての快適さや安心感を意味すると理解されているからではないでしょうか。つまり、保育所において「家庭的」な実践について考えるとは、家庭的な実践ということを、その機能、すなわちその子どもにとっての「快適さ・安心感」という意味として読み替えたうえで、そもそも家庭とは異なる場所である保育所としてそれをいかに実現できるかを考える、ということです。仮に何らかの事情で家庭での睡眠リズムがなかなか安定しない子どもがいたとして、ではそれと同様に「なかなか寝付けない生活」が実践されれば家庭的か、というと当然そうではない。一方で、眠れたら好きなだけ眠る生活が家庭的か、というと単純にそうでもない。「家庭の生活に類似しているかどうか」という実践の形態ではなく、その実践の機能＝子どもにとっての意味を考えていくことが必要なのだと思います。

さて、ここで個々の実践の子どもにとっての意味を考えるにあたっては、何が手がかりとなるのでしょう。このときのポイントは、先述の報告者によるコメントにあったような「ことばで伝えられない（年齢である）からこそ、気持ちをくんであげる」ということと関連しているように思います。これを年齢という観点からとらえ直せば、それは「その子どもにとって快適かどうかということを、子どもの発達要求としてとらえる」と表すことができます。すなわち「子どもの明日の発達につながるものとして子どもの気持ちをどのように受け止め、それを保障するためにどのような支えができるか」という視点から、具体的な実践を選択していけるかということです。これをひとことで言い換えれば、実践の手がかりとして子どもの発達要求をとらえる、ということになると思われます。「子どもにと

っての快適さ」について、「子どもの発達の道すじを保障する」という視点で問いを立てて、実践の表面上の形態ではなく、その子どもにとっての機能（意味）に着目して具体的な実践に取り組めることにこそ、保育者の専門性があるといえるのではないでしょうか。

このような視点から構成される実践は、たとえば次のようなかたちで展開していくと思われます。

＜事例：おしゃぶりも受け入れて＞ [vi]

1月に入園したカズくんはおしゃぶりを愛用していました。昨年の交流会でおしゃぶりについての議論もありましたが、A先生が途中入園する子どもには使う方法もあるのでは、と話されたことを園でも論議し、カズくんの受け入れでは、おしゃぶりを使いながら慣れていく方法をとりました。おしゃぶりの是非はともかく、家で愛用しているカズくんはおしゃぶりがあれば落ち着くし、初日からしっかり昼寝をすることもできました。保育園に慣れてくると、自分の要求をしっかり泣いて主張するようになり、泣きたいときに吸っていたおしゃぶりが逆にいらなくなり（だまってなんかいられない。泣いてやるー！という感じ）自然におしゃぶりは必要なくなっていきました。保育園でいらなくなるとお母さんもすぐに「おしゃぶりはもう卒業ですよね」と使うのをやめてくれました。保育園では、これまでおしゃぶりについてはよく思っていませんでしたが、家庭で使用する子どもの立場で考えると、（特に途中入園、新入園児で月齢が大きい場合）自然にいらなくなるのであれば、保育園に慣れるまでは、その子の安定する方法で慣れる方が早く落ち着くのではないかと考えるようになりました。

この事例について考えてみます。当該の子どもを「おしゃぶりで気持ちを落ち着かせながらまわりをしっかり見ている」子どもであると理解できたとすれば、この年齢期における発達要求と合わせて考えると次のような見通しがもてるかもしれません。それは、いずれ自分の要求や思いをしっかりと主張するようになれば、「心の杖」としてのおしゃぶりは不要になるだろう、という見通しです。このような見通しがあれば、そのときの保育においては、本実践のように「要求を出すための心の杖」として一定の機能を認めたうえで「おしゃぶり」を用いることができるでしょう。いっぽうで普段、家庭において、いわば「口封じ」としてその子どもを静かにさせるためにおしゃぶりが用いられていたとするならば、その子どもにとってのおしゃぶりのもつ意味は前者とは全く違ったものになります。そのときは、この年齢期の発達要求である、相手を感じつつ、相手を介して世界を広げていくことを保障するために、また違った実践のあり方を考える必要が生じるでしょう。ある一つの「家庭に近い形態の実践」たとえばおしゃぶりを、保育所での「家庭的」すなわち子どもにとっての快適という観点から整理してみると、子どもにとって一定の意味をもつ場合もあれば、そうならない場合もありうるのだ、ということがこのような例から理解できるのではないでしょうか。

0歳後半から1歳前半頃であれば、いわゆる「共同注意」「三項関係」の成立に伴い、モノの向こうに相手の姿を見るようになった子どもは、家族・友だちなどの外の世界に、自ら働きかけていくことを始めます。これに基づいてこの年齢期を、「相手」そのもの、「相手」のもちもの、「相手」のしていることを発見し、いわば相手を感じつつ、それを介して世界を広げていく過程の始まりである、と理解することで、子どもはこれに即した発達要求をもっていると考えることができるでしょう。このような観点から具体的な実践をとらえたときにはじめて、たとえ形態が同じ実践であっても、ひとりひとりの子どもにとってそのもつ意味は違ってくるということが見えてくる、さらに

それを実践に反映させられる可能性が出てくるのだと思います。

4. まとめと今後に向けて

以上、保育所保育の中で「家庭的」ということをどのようにとらえるかについて、主に乳児保育の実践検討会での議論をベースに整理を試みてきました。これらから得られたポイントをまとめると、おおむね次のようになるのではと思います。

一つは、「家庭的な保育」を考える際には、ある具体的な実践が「その子どもの家庭での育児形態に近いかどうか」を追求するのではなく、その実践のもつ機能＝子どもにとっての意味を「発達要求」という観点でとらえなおして検討する必要があるだろうということです。「家庭的な保育」とは、家庭で実践していることは何でもあり、ということと明らかに違うのはいうまでもありません。そのいっぽうで、子どもの育ちをとりまく環境が多様化した現在においては特に、これまで保育所の実践の中では積極的に受けとめてこなかった形態の実践だとしても、当該の子どもの発達要求と照らし合わせてなお一定の意味をもつものがありうることは、われわれが理解しておく必要のあることだと思われます。2004年度の愛知県下小規模保育所連合会0歳児保育実践学習会のまとめ[vii]にて述べられている『「ベビーフード」や「おしゃぶり」に頼った子育ても、まずは受けとめて、園での保育を伝える中で信頼できる関係づくりをこころがけたいものです』という観点は、この問題と通じるものがあります。家庭的な保育について具体的に考えるとは、「○○は実践してもよい／するべきではない」対「何でもあり」の枠組みで実践を検討するのではなく、「子どもにとっての快適さ」を子どもの発達要求にかなう形で実現できる実践とは何かについて、「何でもやってみよう」の姿勢で検討するという部分にあるといってよいのかもしれません。発達要求を主眼に据えて「機能と形態」をとらえ直すとは、具体的には一人ひとりの発達の見通しの中で、「何でもあり」ではない「何でもやってみよう」という姿勢をもって保育実践を検討する姿勢に通じるように思われます。

もう一つは、具体的にどのような子どもに対し、いかなる実践ができるかについては、多様化した子どもの育ちを受けとめることと並行して、当該年齢期の発達特徴をふまえた上で、小さな取り組みも含めて今後とも実践を蓄積していく必要があるということです。

一人一人の発達要求をとらえた見通しのうえで「何でもやってみよう」と実践を検討し取り組む際に手がかりになるのは、ある子どもに対する実践を「何となくやってみたらよかった」とするのではなく、意識的に実践し検討の俎上に載せるということだと思います。そのためには、小さな「やってみた」ことをはじめとして、それぞれの実践を蓄積・共有していくことが重要になります。本稿で取り上げた事例報告をもとに、先述の0歳児実践学習会では、「寝かせにくい」「食べない」「気性が激しい」などの、近年各園の0歳児クラスで増えていると感じられているタイプの子どもたちに対する具体的な取り組みに関して、短いながらも交流を深めることができました。特にひとりひとりの生活リズムづくりが中心となる0歳の保育においては、子どもの特徴と関連して、「安心が実現できる担当制とはどのようなものだろうか」などのクラスでの具体的な担当のあり方、食事を中心とした給食室等との園内での理解と連携のあり方、保護者との信頼関係づくりなどが同時に問題になるものと思います。実践を蓄積していくという意味で、このように実践交流の機会そのものを今後とも積み重ねていくこと、もしくはそのような場を各園で新たにつくっていくことこそが、「家庭的とは」「子どもにとって快適とは」ということを追求していくうえで大きな意義があるのではないでしょうか。

i 名古屋短期大学保育科　matsumoto@nagoyacollege.ac.jp

ii 詳しくは以下の文献等を参照のこと。
土方弘子.（2001）.乳児保育の現状と歩み.乳児保育研究会（編）,改訂版資料でわかる乳児の保育新時代（pp.86-98）.東京：ひとなる書房.

iii 佐々木聰子.（2003）.乳児期と在宅保育・家庭的保育.網野武博・杤尾勲（編）,新版・乳児保育（pp.151-170）.東京：チャイルド本社.

iv 岡田るみ子.（2005）.乳児保育と環境._内正子（編著）,乳児保育への招待：胎児期から2歳まで（pp.77-100）.京都：北大路書房.

v 2005年度愛知県下小規模保育所連合会0歳児保育実践学習会当日の議論の中でも、これに関する多くの問題が提起されました。

vi 2005年度愛知県下小規模保育所連合会0歳児保育実践学習会報告より抜粋（柴田由美子氏執筆）。ただし筆者（松本）により文中人名は仮名に置き換えた。

vii 柘植節子氏の執筆

Ⅳ 海外保育子育て支援の動向

カナダから学ぶ子育て支援プログラム

小嶋玲子

1. はじめ

桜花学園大学保育学部の2004年度海外幼児教育研修(2005/2/28～3/7)は、カナダでの幼児教育・子育て支援研修でした。報告集[1]は別にありますので、視察研修の詳細については、そちらを参照していただければと思います。ここでは、カナダで視察研修してきた4つの子育て支援プログラムを、筆者の授業での取り組みも交えながら紹介します。同時に、海外研修の意義とこれらのプログラムを保育者が学ぶ利点についても触れたいと思います。

2. 4つの子育て支援プログラム

4つの子育て支援プログラムとは、「Nobody's Perfect(ノーバディーズ パーフェクト)」「Roots of Empathy(ルーツ オブ エンファシー)」「Second Step(セカンド ステップ)」「Social Responsibility(ソーシャル レスポンシビリティ)」の各プログラムです。ただし、「Second Step」「Social Responsibility」を子育て支援プログラムと呼ぶことには異議が出るかもしれません。しかし、筆者は、これらのプログラムも子育て支援プログラムとして位置づけたいと考えています。その理由は以下の文章の中で述べます。

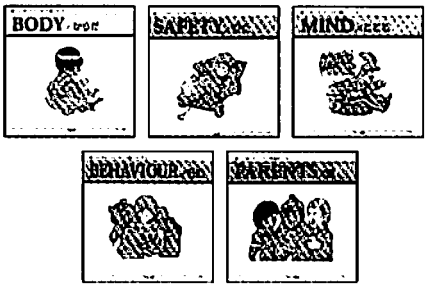
(1)「Nobody's Perfect」

まず、「Nobody's Perfect(以下NPと略す)」について簡単に説明します。NPプログラムは、1980年にカナダ保健省と大西洋4州の保健局により開発された子育て中の親支援プログラムです。1987年には、カナダ全土に導入され、現在カナダの全州・準州で実施されています。プログラムの内容は、0歳から5歳までの子どもをもつ親を対象にし、参加者がそれぞれに抱えている悩みや関心のあることをグループで出し合って話し合いながら、必要に応じてテキストを参照して、自分にあった子育ての仕方を学ぶものです。日本では2002年に2社からテキストの翻訳書[2][3]が出版され、2004年4月にNP-Japanが設立されています。日本に導入されて間もないうえに、「NPプログラムを実施することができるのは、正式なファシリテーター研修を受けたNP Facilitator(ファンシリテーター:NPプログラムを企画・準備し、実施する人を指す。親がグループに参加し、そこから何かを得ることをしやすくする人)だけです。」したがって、実際にこのプログラムを

日本で実施しているところはまだ少ないですが、NPプログラムの考え方は、急速に日本で広がり、日本での子育て支援のあり方に大きな変化をもたらしました。その理由として筆者は次の3点を考えています。

第1に、使用するテキストの表題である「Nobody's Perfect」(日本語訳は「完璧な親なんていない！」)のことばからのインパクトです。「はじめから一人前の親などいません。皆まわりからの助けを得ながら親になっていくのです」というメッセージは、母性神話にとらわれている多くの母親たちの気持ちを軽くしました。そして援助者側にも、親の育ちを援助することに力点が置かれるようになりました。

「Nobody's perfect」のテキスト



←
ドメス出版

→
ひとなる書房

第2に、NPプログラムが参加者中心のプログラムである点です。日本の子育て支援は、専門家が対象者を教えたり、直接サポートしたりする「専門家中心アプローチ」が主流でしたが、NPプログラムの紹介とともに、親を信頼し、親自身が自ら学ぶことを支援する方向へと変ってきています。

第3に、「価値観の尊重」「体験を通して学ぶ」というNPプログラムの2つキー・コンセプト(基本的な考え方)です。NPプログラムの特長のひとつは、参加者が自分自身の価値観と向き合い、子育てをはじめ生活のさまざまな局面に自分の価値観がどのように影響しているかを体験を通して知ることができる点にあります。このことは、日本での価値観の多様化に対応しきれていない援助者に1つの方法を提示したと考えられます。詳しく知りたい方はテキスト(2)(3)やNP-Japanのホームページ(4)を参照してください。

さて、このようなNPプログラムが開発国であるカナダにおいてどのように実施されているのかを、研修で深めてきたわけです。ただ残念なことに、NPプログラムはプライバシーの問題があり実際に行われているところを見学することはできませんでした。その代わりに、そのプログラムの参加経験者である日本人のお母さんとプログラムの実施担当者からお話をうかがうことができました。実際にプログラムを行っている担当者とプログラム参加者の両方からお話をうかがえたことは有意義でした。担当者からは、Non Judge(決めつけない・善悪の判断をしない)という単語が何度も出されました。参加者のお母さんは、ここで友人ができ、否定的な自分も受け入れられるようになり、子どもとのコミュニケーションの仕方を学んだと話してくれました。併設のドロップインセンター(日本の子育てサロン・子育て支援センターのような場所)には、視察当日にはインド人、ネイティブアメリカン、日本人の親子がいました。移民の多い国において、風俗習慣言語の異なる国で身近に親しい人のいない子育ての大変さは想像を超えるものがあるでしょう。そういう国だからこそ、NPプログラムが開発され、ドロップインセンターがいくつも設置されていることが実感として理解できま

した。視察をした各施設ではさまざまな人種の子どもたちがいて、さまざまな人種の人が働いていて、生活習慣の異なる人々が共存するための工夫の必要性を肌で感じることができました。こういうことは、書物を通じて知識として知っていても、現地で実際に体験することで理解が深まるものです。それこそが海外視察研修の意義というものでしょう。

筆者は、この視察研修に前後して授業の中で次のような取り組みをしました。2004年度の3年生のゼミでNPファシリテーター用テキスト『親教育プログラムのすすめ方　ファシリテーターの仕事』(5)を基にNPプログラムについて学ぶ機会を作りました。NPプログラムのファシリテーターになるためには、正規のトレーニングを受けなければなりませんが、このテキストを通して、学生さんたちは自分の価値観に気づき、価値観を押しつけないコミュニケーションのあり方を学んだように思います。さらに、2005年度には、2,3,4年生の各ゼミでファシリテーターの役割について学びました。2年生は、大阪府がNPプログラムを基に作成した親教育のためのパンフレット(6)、3年生は前述のNPファシリテーター用テキスト(5)、4年生は三重県がニュージーランドのプレイセンターでのプログラムを基に作成した参加型の親教育プログラムのビデオとワークシート(7)をそれぞれ用いて、学習しました。それによって、個人の意見を尊重しながら、グループ内での発言が活発になるような意見の促し方やまとめ方などの技術を習得しました。

前述したように、現在、子育て支援は「専門家中心アプローチ」から「参加者中心アプローチ」に変わりつつあります。保育者が、保護者の方の多様な価値観を尊重しつつ、子どもの最善の利益を追求するためには、NPプログラムのキーコンセプトである「価値観の尊重」「体験を通して学ぶ」を理解することが、大きな助けとなってくれるように感じます。

そしてファシリテーターの技術を学ぶことは、親のグループ学習での学びを応援するだけでなく、子どもたちのグループでの学びも効果的に援助・指導ができるようになると思われます。

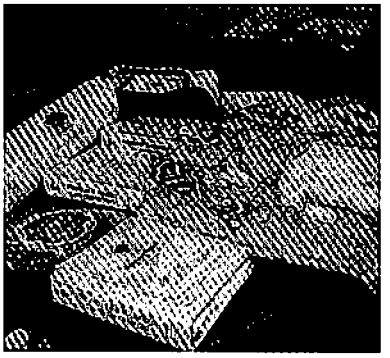
(2)「Roots of Empathy」

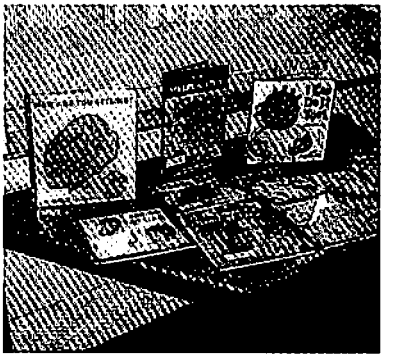
「Roots of Empathy」は、4歳から14歳までの子どものための親教育、親になるための準備の教育として，1996年にメアリー・ゴードンによってトロント(カナダ)の学校の2クラスで試験的に開始されたプログラムです。2003年には722クラスにまで増えたことを今回の研修でお聞きしました。プログラムの内容は、特定の0歳の赤ちゃんとその親が、年間を通じて3週間おきに学級を訪問するものです。その前後の週には事前事後の学習の時間があります。これらの学習を通して、子どもたちはその年齢なりに乳児の発達について学んでいきます。実際に親子のやりとりや、赤ちゃんの表情・行動を見ることによって、言葉で表現されない他人の感情を理解する共感能力を育てることができ、それによって、思春期以降の「攻撃性」が減少するとも言われています。10月から6月の9ヶ月間のなかで①Meeting the baby(出会い)②Crying(泣く赤ちゃん③Caring and Planning for the Baby(赤ちゃんの世話)④Emotion(感情)⑤Sleeping(睡眠)⑥Safety(安全性)⑦Communication(表現・発言力)⑧Who am I?(私は誰？)⑨Good bye and Good Wishes(さようなら)の9つのテーマをもとに授業が進められていきます。

カナダでの研修では、小学校1年生のクラスで「⑥安全」の事前学習を見学させていただきました。最初に、乳児が笑ったり、立ったり、歩いたり、というような乳児の成長について書かれた絵本を教師が読

み、発達の大きな節目(mile stone)についての確認がなされました。その後、成長に伴ってどんな環境の危険があるのか、それをどうやって予防すればよいのかということを話し合っていました。テーブルの上に赤ちゃんを寝かせたら、転がってしまうかも・・・。薬を手の届くところに置いていたら、ふたが開いて口に入ってしまうかも・・・。このような場合を想定して、どうしたら赤ちゃんが安全に過ごすことができるかを考えていました。この授業では、子どもたちの発言によって進められていく部分が大きいので、子どもたちの発言力や問題解決力も養うことができるそうです。

身近に小さい子どもたちと接する機会のないまま、親になってしまうことの多い現代社会において、赤ちゃんの育ちや親と赤ちゃんのかかわりを知る体験は、貴重です。日本でも、そのような取り組みが始まっています[8]。心理臨床の専門家を訓練するイギリスのタビストック研究所では、訓練プログラムの1つに赤ちゃんのいる家庭を一定期間定期的に訪問して、そこでの親子のかかかわりと自分の心の動きを観察するというものがあります。人間の心の理解において、乳児とお母さんのかかわりを観察することはとても大切だからです。保育者をめざす学生さんにとっても、年間を通じて乳児と親のかかわりを観察できれば得るものは多いと思います。





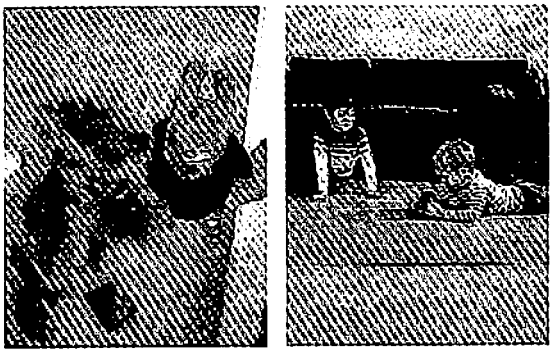
教材「Roots of Empathy」

(3)「Second Step」

「Second Step」プログラムは、米国ワシントン州にあるNPO法人Committee for Children(1987年設立)によって「子どもが加害者にならないためのプログラム」として開発されました。「キレない子どもを育てよう」を合い言葉に、子どもが集団の中で社会的スキルを身につけ、さまざまな場面で自分の感情を言葉で表現することを通して、対人関係能力や問題を解決する能力を育成し、怒りや衝動をコントロールできるようにレッスンが計画されています。2001年、全米百数十の防止教育プログラム中から「最も効果的なプログラム」として米国教育省(日本の文部科学省)より最優秀賞を受けています。カナダ、ノルウェー、ドイツ、デンマーク、イギリスなどの国でも使用され、国際会議も開かれています。

日本では、2001年に「NPO法人日本子どものための委員会」が設立され、本プログラムの未就学児用教材を出版し、研修を開始しています。米国の「Second Step」は未就学児向け、小学生低学年向け、高学年向け、中学生向け、及びその保護者向けのプログラムがあります。日本では学年別ではなく、年齢別のコースに分類する方向で改訂が進められていて、現在は4歳から8歳を対象とした「セカンドステップ1」のプログラムが出版されており、小学3年生から6年生用がまもなく出版予定です。日本では2006年4月時点で22カ所の施設で実施されているようです[9]。

カナダでの研修では、幼稚園の5歳児クラスでの実践の様子を見学させていただきました。見学したク



セカンドステップで使用される教材の一部

ラスでは、最初に感情について書かれている絵本での導入があり、その後「Second Step」の写真を使ってそれぞれの気持ちを感じ取り、表情や言葉で表現する学習をしていました。最後にその日の学習を基にして自分の経験を絵に表す活動を行なっていました。

筆者は、日本での実践の様子をセカンドステップ指導者研修会に参加したおりにビデオで見ていましたが、1クラス15名程度のカナダの方が、それぞれの子どもたちの表情や意見の把握がうまくできているように感じました。学生さんたちは、プログラムを実践する教師側とそれを受ける子どもの側の両方の立場から観察をしており、さすが保育者志望と感心いたしました。

視察する前の2004年度後期に筆者の2年生ゼミで、「セカンドステップ1」(10)を学びました。お互いが子どもと教師になってロールプレイをしながら、実施方法を学びました。この学習を通して、子どもたちの葛藤場面で保育者としてどのような声かけをしていけばよいかを考えることができたと思っています。カナダ研修参加者の全員が事前指導で「セカンドステップ」について学びましたが、筆者の2年生ゼミで時間をかけた学習をおこなった学生さんたちは、現地での視察においてもより深く研修ができたように思います。事前学習の大切さを改めて認識した次第です。

保育者がこのプログラムの手法を知ることで、たとえ、このプログラムを利用しなくても、子ども達が衝動的な行動をしないですむ方法や怒りへの対処法を理解し、日々の保育の中で活かすことができると考えています。保育者の適切な対応は子どもたちや保護者のモデルにもなります。また、幼稚園や学校で子どもたちだけがこのプログラムを学ぶのではなく、子どもたちが学んだことを保護者に伝えることで、保護者が子どもたちへの加害者になる可能性を減らし、家庭でのしつけにおいて効果があると思います。こういった意味で、セカンドステップは親教育プログラムでもあり、親子の関係改善に効果が期待できる子育て支援プログラムであると考えます。

(4)「Social Responsibility」

「Social Responsibility」プログラムは子どもたちが社会的に責任ある行動をとることを学んでいくためのプログラムの総称です。このプログラムについては現地ではじめて知りました。このプログラムの中に「Roots of Empathy」「Second Step」などのプログラムが含まれます。各学校の実情に合わせて様々なプログラムが導入されて、子どもたちの社会的責任感を培う努力がなされていました。今回2校の小学校を訪問しましたが、Bayviw Elementary Schoolでは、「be Safe, be Fair, be Kind」(安全、公平、親切)という3つの言葉を行動規範として、それぞれの場所でこの3つのキーワードが守れるような工夫(掲示等)や活動(守れた人への賞賛等)がなされていました。Tillicum Annex(Annexは分校という意味です)の行動規範は、「one for Self, one for Another, one for Environment」(人は、自分のために、他の人のために、環境(自分のいる場所)のために 行動しなさい)でした。行動規範を教えるための工夫として、視覚的な情報を多用させているというお話を伺いました。例えば各教室に信号機の絵が貼ってあり、子どもたちと次のような約束をしてい

ます。青はOKで、自分の問題を解決してよいのです。黄色は注意。深呼吸をしたり、5を数えてみて気持ちを落ちつかせたりすることが求められます。赤はストップ。行動を止めて自分の気持ち(怒り)を認識することが求められています。そして先生は信号機の色を伝えて子どもたち自らが自分の行動を正す機会を作っています。問題解決にあたっては、自分の意志を相手に何度も伝えることが基本とされていましたが、それでも解決できないときは、Problem Solving Room(問題解決の部屋)という特別な部屋で、先生が同席して話し合うそうです。先生はその場限りの解決方法ではなく、人が生きていく上で使える問題解決のスキルを教えるようにしているとのことでした。Tillicum Annexの場合は150人の児童のうち、109人は英語が母国語ではなく、家庭では英語以外の言語を話しているそうです。また1/5の生徒がなんらかの障害を抱えています。経済的に恵まれていない児童が多い地域ということもあって、学校内では子どもたちが生活技術や適切なコミュニケーション力をつけることを重視していました。学校で学んでも家庭や地域でそれが活かされない実態があるので、学校内だけでなく、保護者や地域のコミュニティーも巻き込んで啓蒙していく必要性を強調されていました。教師や親がまず感情のコントロールや問題解決のスキルを学び、お手本を示せるようになる必要があります。

この点で「Social Responsibility」プログラムは「Second Step」と同じく子育て支援プログラムでもあるわけです。

日本においても、基本的生活習慣の形成が弱い子どもたちや葛藤状況での対処方法が不適切な子どもたちの増加が危惧されています。「Roots of Empathy」「Second Step」も含めた「Social Responsibility」プログラムから保育者が学ぶことは多いと思います。

3. おわりに

海外研修の意義も伝えながら、ゼミでの授業にも触れ、4つの子育て支援プログラムを紹介してきました。この文章を読んで、海外研修と紹介したプログラムに関心を持っていただけたら幸いです。

カナディアンロッキーにて

「Roots of Empathy」の授業参観前に担当者から説明を受ける

参考文献

(1)　「桜花学園大学保育学部　カナダ幼児教育・子育て支援研修報告集」(2005)

(2)　ジャニス・ウッド・キャタノ著　三沢直子監修　幾島幸子翻訳『普及版～カナダ生まれのテキスト～完璧な親なんていない！』　ひとなる書房　(2002)

(3)　ノーバーディーズ・パーフェクト(全5冊)
シリーズ① Body/からだ　シリーズ② SAFE/安全　シリーズ③ MAIND/こころ
シリーズ④ BEHAVIOUR/行動　シリーズ⑤ PARENTS/親　(別冊シリーズ⑥ FATHER/父親)
子ども家庭リソースセンター編集　向田久美子翻訳　加藤忠明監修 (①･②)
ドメス出版　(2002)

(4)　Nobody's Perfect-Japan　ホームページ
http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/　2006/6/10 閲覧

(5)　ジャニス・ウッド・キャタノ著　三沢直子監修　杉田真・門脇陽子・幾島幸子翻訳
『親教育プログラムのすすめ方　ファシリテーターの仕事』　ひとなる書房(2002)

(6)　親学習教材　「親」をまなぶ「親」をつたえる　大阪府教育委員会作成(2003)
親学びサポートセンター　ホームページ
http://www.oymn.net/pdf-sido-kyozai/index.html　2006/6/10 閲覧

(7)　0歳から6歳までの子育てを楽しむために　ささえあいまなびあう子育てをめざして
ワークシートおよびビデオ教材「はぐくむきずな　子育ての知恵袋」(全28分)
「こんなときあなたならどうする？」(全22分)
編集・発行　三重県教育委員会生涯学習室　監修・執筆　久保田力、小林恵子　(2005)

(8)　永田陽子・櫃田紋子・福川須美・伊志嶺美津子・田島昌子「他者への共感を育てる教育プログラム　カナダの『共感教育』の実践とその有効性－幼児期から始める親になるための準備教育－」
財団法人安田生命社会事業団研究助成論文集　通巻37巻　pp209－213　(2001)

(9)　NPO法人日本子どものための委員会　ホームページ
http://www.cfc-j.org/secondstep/　2006/6/10 閲覧

(10)　「second step暴力防止プログラム(普及版)(4－8歳向け)」レッスン教材
日本子どものための委員会　(2001)

資 料

2005年度保育子育て研究所事業報告

一　子育て交流会

2004年度は、子育て交流会が5月から7月まで月1回で宍戸洋子教授が担当し、専攻科学生の参加をはかっていただいた。9月からは、宍戸先生が引き続き月1回で担当するとともに、清葉子氏が復帰されて、毎週開催が実現した。上村鐘子さん(緑区)、水谷真理子さん(津島市)のお二人に9月から月1回ずつ運営にご協力をいただいた。これらの結果、子育て交流会はたいへん充実したものになった。後期には、保育学部3年ゼミが参加した(北島ゼミ、浅野ゼミ、藤田ゼミ、田中ゼミ、古畑ゼミ、左口ゼミ)。

二　夏季保育研究セミナー

7月24日、保育科卒業生をはじめとする現場の若手保育者たちを迎えて第3回を開催した。
午前の今井和子先生(東京成徳大学子ども学部教授)の講演には、市民を含め137名が参加した。
午後の分科会と実践屋台村には、117名が参加し、外部講師として3名のご協力をいただいた。
参加者数の減少は、保育科卒業生へのはたらきかけが若干弱かったことがその一因と判断される。夏季セミナーについてのコンセプトのゆらぎがなかったかどうかも慎重に検討される必要がある。

三　高校生中学生のための保育学入門講座

2004年度に学園の栄キャンパス土曜講座として開催された保育学入門講座は、2005年度は研究所主催事業として、下表のような五氏の先生がたに担当していただき、無事終了することができた。

日　程	講　師	講義題目	申込者数	参加者数
第1回5月28日	神田英雄教授	保育所・幼稚園で子どもをどう理解するか	183	152
第2回6月 4日	木村和子教授	乳幼児のあそびについて	167	130
第3回6月11日	大南匠講師	子どもの音楽表現と癒し	188	149
第4回6月18日	小嶋玲子助教授	子育て支援―時代の流れ、社会の動きを知ろう―	99	67
第5回6月25日	田中義和教授	作ろう！金シャチに負けないピカピカ泥だんご	33	25

申し込みのべ人数は425名、内訳は、桜花高校215名、ほかの高校54校から201名、中学2校3名、一般6名であった。
募集の受け付け、手配、集約等は入試広報課に担当していただいた。

四　公開講座
企画の趣旨内容と子育て交流会との関連を検討するうち、諸般の事情から年度末の開催を見送った。

五　保育子育て研究所年報第3号の発行
本年報の発行をもって果たされた。内容は、3年目を迎えた子育て交流会の充実と発展、田中義和教授の編集による保育実践報告、保育学部海外研修にもとづくカナダ子育て支援事情報告、松本博雄講師による論稿などを掲載することができた。

六　保育子育て研究所の重点課題について
①　研究所の条件整備と機能強化
この面での前進はあまり図られていないのが現状である。予算規模において若干の増とアルバイト費の拡充・活用以外特筆すべき動きはない。保育の研究教育活動の発展を実現する上で、キャンパス全体の中での研究所機能の広がりを可能にするような条件整備がきわめて重要になりつつある。
年を追うごとに充実を見せている子育て交流会は内部的にも外部的にも高く評価されるべきであるが、それ以外充実を図るための基礎的条件整備の進展がない現状では機能の向上、強化は厳しい課題と言える。

②　付属幼稚園との関係
宍戸洋子教授、清葉子氏の働きかけにより、子育て交流会を通じて、付属幼稚園の遊戯室を月1回ずつ利用できることになり、子育て交流会への付属幼稚園側との共同が図られてきた。
付属幼稚園の子育て支援事業としての意義も併せもつこの事業の推進に、上記に述べている人的物的な支援が欠かせない。

③　夏季保育研究セミナー
セミナーの性格、ねらいについて、従来の同窓会との違いを明らかにしてきたが、事実上実体的には当面保育系卒業生対象セミナーになると考えられる。セミナーへの参加呼びかけを通じて、広くさまざまな職場から出身校を問うことなく、新卒者をはじめとする若手の保育者の多くの参加を実現することが期待される。

④　保育学入門講座
2004年度の土曜講座は、初年度の取り組みとして3ヶ月にわたる総合的な講座となったが、2005

年度からは5人の担当による講座となった。キャンパスの保育教育関係の研究者を中心とする集団的リソースを生かして、今後とも充実した内容を提供していくことができるよう追求していきたい。

⑤　公開講座

学生、一般市民を問わず1回の講演として企画する形を想定している。保育を学ぶ総合キャンパスを志向するという方向性を踏まえると、在学生たちの特別講座の性格をもたせたものとしていくことも考えられる。例えば、2004年度の山崎翠講演のような、絵本と子育てをテーマにしたものを継続していくなど。研究所が提供する内容の水準を上げることを追求することも一貫した重要課題である。たとえば、中堅以上の保育者向け講座などが考えられる。

⑥　事業の拡大

Ⅰ　保育科、保育学科の全専任の力を生かして事業を構築すれば、現状をはるかに超える水準の事業が可能である。しかし、現実には専任教員の多忙化状況のため具体化しにくくなっている。たとえば他の学園でも取り組まれている子育て相談事業は、週ごとの交代制で毎週1回1コマ程度の枠で設定していくことが検討されてもよい。他方で、このような正規コマ外の仕事が無数に増えていくことが好ましくないことも考慮しなければならないであろう。

Ⅱ　現任保育士を支える手立てとして「課題研究」の成果を年報に掲載したりして現場の実践を奨励することも意義がある。また同時にすぐれた保育実践の掘り起こしという意義ももっている。

注：2006年度の現任研修では規模が縮小され課題研究もなくなっている。

2005年度保育子育て研究所会計報告

2005年度の保育子育て研究所予算は、予算額2,163,165円が認められた。
これに対して、年度内に執行された予算は1,212,163円となり、予算に対する執行率は56.04％となった。

事務アルバイト	交流会アルバイト	夏季セミナー	年報3号	卒業生向けチラシ	消耗品
105,000	138,880	327,525	495,600	63,000	82,158

注：高校生向け入門講座関係は、広報予算による別枠執行とされている。

ここでの執行率の低さは、計上項目の不適切さが初年度以来手直しされていないという事情が関係している。しかし、すでにふれたように、公開講座が実施されなかったため、講師料が執行されなかったことが2004年度決算額1,371,468円を下回る結果となった。2006年度については、研究所事務および子育て交流会運営関係のアルバイト費を積極的に活用することなどが確認されており、次年度には執行率の改善を図ることが求められている。

2005年度役員体制　2期1年目　主任研究員は2年任期、研究員は1年任期

所　長　　左口眞朗（保育学部）
副所長　　田中義和（保育学部）
主任研究員　神田英雄（保育学部）
主任研究員　宍戸洋子（保育科）
研究員　　森本美絵（保育科）

保育子育て研究所年報　第3号　執筆者：五十音順

小嶋玲子　　桜花学園大学保育学部教授

清　葉子　　子育て交流会運営担当　桜花学園大学保育学部非常勤講師

宍戸洋子　　名古屋短期大学教授

田中義和　　桜花学園大学保育学部教授

松本博雄　　名古屋短期大学講師

山本春美　　知多郡武豊町立中山保育園長

編集責任　　保育子育て研究所長

保育子育て研究所年報　第3号（2005年度）

発行者	名古屋キャンパス保育子育て研究所
発行年月日	2006年8月10日
住所	〒470－1193 愛知県豊明市栄町48 名古屋短期大学内
電話	0562－97－1306
FAX	0562－98－1162
HP	http://www.nagoyacollege.ac.jp/
印刷	(株)シイエム・シイ

桜花学園名古屋キャンパス
保育子育て研究所